

Habu, Junko, 1981: Pottery from the second half of the Early Jomon period [Zenki kohan no doki-gun]. In The Isarago Shell-midden Site [Isarago Kaizuka Iseki], by the Excavation Team of the Isarago Site [Isarago Iseki Chosakai], Vol. 1, pp. 50-58, Vol. 2., pp. 11-34. Board of Education of Minato Ward [Minato-ku Kyoiku Iinkai], Tokyo.

第3群 前期後半の土器群 (Pl. 5 - 137 ~ Pl. 17 - 231)

縄文時代前期後半の土器を一括した。本群は器形・文様により以下のように分類される。

器形

深鉢A形 胴上半部から口縁部にむかって外反する、いわゆる朝顔形深鉢。口縁は主として平縁 (174・194・197・201・222・231)。

深鉢B形 胴上半部から口縁部にむかってゆるやかに外反し、口縁部で直立、ないしわずかに内彎するキャリパー形深鉢。口縁は主として4単位の山形波状縁 (160・161・190・195・196・198・206・212・214・220)。

深鉢C形 胴上半部から口縁部にむかって強く外反し、口縁部で内側に屈曲、ないし強く彎曲するキャリパー形深鉢。口縁は主として4単位の山形波状縁 (155・156~158・175~177・180・203・209・215~218)。

深鉢D形 底部から口縁部にむかって直線的に開く深鉢。底部が突出するもの (205・225等) もある。口縁は平縁 (159・166・167・181~183・189・191~193・200・205・207・210・211・213・223~230)。

鉢形 (221)

文様

1類 径5mm以上の幅の広い半截竹管 (以後、半截・多截竹管の総称として用いる) による平行沈線文を主文様とするもの

- a. 幅の広い平行沈線文のみが施されるもの (137~151・164・165・194~198・200・212)
- b. 縄文を地文として幅の広い平行沈線文が施されるもの (153・154)

2類 径4mm以下の幅の狭い半截竹管による平行沈線を主文様とするもの

- a. 幅の狭い平行沈線文のみが施されるもの (152・156~161・199・213)
- b. 縄文を地文として幅の狭い平行沈線文が施されるもの (155・201~204・215・219)
- c. 幅の狭い平行沈線文と半截竹管による平行刺突文が施されるもの (205)
- d. 縄文を地文として幅の狭い平行沈線文と各種刺突文が施されるもの (216・218)

3類 その他の沈線文

- a. 条痕状の集合沈線文が施されるもの (166・167・214)
- b. 鋭利な工具による沈線文が施されるもの (168・206)

4類 半截竹管による爪形文を有するもの

- a. 半截竹管による平行沈線が水平に施文され、その中に同一施文具によって爪形の刺突が加えられるもの (221)
- b. 幅の広い半截竹管による平行沈線の中に同一施文具によって爪形の刺突が加えられ、それによって曲線的な文様を構成するもの (172)
- c. 半截竹管による平行沈線と一本の沈線とが器面全体に不規則に施され、その上に一条の爪形の刺突が加えられるもの (223)

5類 その他の刺突文・押し引き文

- a. 縄文を地文として、半截竹管による平行刺突文が施されるもの (217)

b. 櫛歯状工具による三列の刺突文(208)

c. 櫛歯状工具の押し引き・引きずりによる擬似貝殻背圧痕文(169～171・207)

6類 浮線文(173)

7類 変形爪形文と半截竹管による平行沈線文を主文とするもの(222)

8類 縄文(174～188・209・220・226～231)

9類 無文(189～193・210・211・224・225)

以上の器形・文様を組合せた分類が表8-5である。

		深鉢A形	深鉢B形	深鉢C形	深鉢D形	鉢	不 明
1類	a	194・197	195・196・198 212		200		137～151・164・ 165
	b						153・154
2類	a		160・161	156～158	159・213		152・199
	b	201		155・203・215			202・204・219
	c				205		
	d			216・218			
3類	a		214		166・167		
	b		206				168
4類	a					221	
	b						172
	c				223		
5類	a			217			
	b						208
	c				207		169～171
6類							173
7類	222						
8類	174・231	220		175～177・180 209	181～183 226～230		178・179 184～188
9類		190			189・191～193・210 211・224・225		

表8-5 第3群器形・文様分類対照表

次に、文様分類を中心として、出土土器に対する説明を行う。

1類 (137～151・153・154・164・165・194～198・212)

幅の広い平行沈線文を主文様とするもの。a (地文を有さない) としたものがほとんどである。文様構成としては ①沈線が横走・斜行して三角形や菱形の区画をつくり、その中に木葉状のモチーフが充填されるもの(195・197・212) ②木葉状モチーフの崩れと捉え得る曲線文が器面全体に施されるもの(194) 等がみられる。196は、木葉状のモチーフが縦方向になり、平行沈線の幅が2類に近くなる点から、本類の中では新しい様相を示すものである。本類は主として深鉢A形・B形に施文される。

2類 (152・155～163・199・202～205・213・215・216・218・219)

幅の狭い平行沈線文を主文様とするもの。1類に比して、地文に縄文を有するものが多

い。文様構成としては、①平行沈線が単一に数条横走し、それによって区画された縄文部に渦巻文・曲線文が充填されるもの(201・202・204) ②平行沈線が集合沈線状に横走し、縄文部と交互に帯状をなすもの(215・216)等がある。本類のうち、aの一部(213等)とc(205)を除いた大部分は、深鉢C形を呈する。これらは、器形・文様構成等において、諸磯b式の浮線文系土器と同一の特徴を示しており、b式でも新しい時期に属すると思われる。文様構成としては、①の方が②よりも古い様相を示す。

213は深鉢D形を呈し、粗雑な平行沈線が水平方向に施される。200は輪積痕を意図的に残した折返し状の複合口縁を有する。205は、底部の突出する深鉢D形で、水平方向の平行沈線と平行刺突列を有する。これらは、本類中ではやや特異な存在であるが、施文具・施文法等から同一時期の所産と考えられる。

3類(166～168・206・214)

本類では、1類・2類以外の沈線文を有するものを一括して取り扱った。

3類aは、浅く太い集合沈線が条痕状に施文されるもので、復元可能なのは214一個体のみである。波頂部から左右に斜行した集合沈線と胴部の水平方向の集合沈線によって三角形の区画が構成され、区画内は無文のまま残る。胴下半にも同様の文様帯が構成される。施文具は、櫛歯状工具、ないしは半截竹管を束ねたものであろうか。器形は深鉢B形に分類したが、口縁部の彎曲度は弱い。

3類bも、器形を推定し得るのは206一個体のみである。器面全体に鋭利な工具による沈線が不規則に施され、特定の文様構成はみられない。薄手の小型深鉢である。

4類(172・221・223)

本類では、各種の爪形文を有するものを一括した。

4類a(221)は、小型の鉢の屈曲部附近に平行沈線が水平に三条施され、その中に爪形の刺突が加えられたものである。丁寧に調整された薄手の小型土器で、他の土器とは異質の感がある。前期後半は、器種の多様化により浅鉢・鉢の出土例が増加する時期であるが、本遺跡では明らかに深鉢から区別し得るのは一個体のみであった。

4類b(172)は、いわゆる連続爪形文によって文様が構成されるものである。連続爪形文は、浮線文とともに諸磯b式の主たるメルクマールとなっているが、本遺跡では一片のみの出土であった。器形は不明。

4類c(223)は、半截竹管による平行沈線と、同一施文具の背面による沈線とを不規則に施し、その上に一条の爪形の刺突列が加えられるものである。沈線の施文方向は縦・横ともにあり、施文の仕方は粗雑な感じである。器形は深鉢D形。

5類(169～171・207・208・217)

爪形文以外の刺突文・押し引き文等を有するものを一括した。

5類a(217)は、無節Lの縄文を地文とし、半截竹管による平行刺突文が施されるものである。器形・文様等から考えて、2類のキャリパー形土器と同種のものであろう。

5類b(208)は、三列の小刺突により文様が描かれるものである。施文具は、三本を単位とした櫛歯状工具であろう。小片のため、文様構成は不明だが、三角形・弧状のモチ

ーフがみられる。器形は不明。

5 類 c は、櫛歯状工具の押し引き・引きずりによって貝殻背圧痕状の文様が施されるもので、器形を推定し得るのは207一個体のみである。部分的には、アナダラ属の貝殻背圧痕も用いられている可能性がある。器形は深鉢D形であろう。169～171も、207と同様の文様技法と思われるが、小片のため器形等は不明。

6 類 (173)

浮線文が施されるもの。173一片のみである。水平方向の2本の浮線が近接して施され各浮線上には、斜めの刻み目がそれぞれ逆方向に加えられて、矢羽根状を呈する。器形は不明。浮線文がほとんどみられないことは、本遺跡の土器群の著しい特徴である。

7 類 (222)

東部関東系の、変形爪形文と平行沈線文を有する土器。222一個体のみである。口縁直下と胴中央部に変形爪形文が施され、その間には平行沈線が施文される。胴下半のS字状・逆S字状の文様も、文様技法としては連続爪形文と同一であるが、施文原体が異なると思われる。口縁には条線文を有する。器形は深鉢A形。

8 類 (183～185・209・220)

縄文のみが施されるもの。出土量は、1類・2類に次いで多い。縄文原体は無節Lが最も多くみられ、次いで単節RLが多い。183～185・209は、多摩ニュータウンNo.88遺跡で「かたい繊維の縄文」（雪田1968）とされたものと同類の縄文であろう。器形は深鉢D形が多い。220は縄文の条が非常に太く、本類の中では特異な存在である。深鉢B形で、波状縁を有し、色調は灰褐色を呈する。

9 類 (191～193・224・225)

無文土器。器形は深鉢D形がほとんどで、底部が突出するもの(225)もある。191～193・224は、輪積痕を意図的に残した折返し状の複合口縁を有する。これは本類の土器に顕著にみられる技法である。浮島系の土器にも輪積痕を残すものは多いが、それらとは区別されるべきであろう。

以上の分類をふまえた上で、第3群とした土器について若干の考察を試みる。

第3群のうち、7類とした東部関東系の土器は浮島Ⅱ式に比定される。それ以外のほとんどは諸磯b式の範疇に含まれるであろう。

諸磯b式に関しては、近年、その細分についての論考が相次いで発表され（鈴木徳雄1979、中島1980、鈴木敏昭1980、今村1980他）、除々にその全容が明らかにされつつある。これらの諸論考は、従来大ざっぱに諸磯b式として包括されていたものを、爪形文系・浮線文系・沈線文系の各々に分解し、それぞれの共伴関係、及びその型式学的変遷を明らかにすることにより細分を試みている点で共通する。これらの論考以前にも、山内清男（栗原1961を参照）、西村正衛（西村1966）等により、爪形文系土器群が古式に位置づけられてはいたが、細分された各段階毎の具体的な内容について体系的に論じられるようになったのは近年のことである。

表8-6は、鈴木徳雄・中島宏・鈴木敏昭・今村啓爾の四氏の細分案の概略を筆者なりにまとめたものである。何段階に細分するかは各研究者によって異なるが、基本的な流れとしては共通する部分も多い。

鈴木徳雄は、b式の沈線文系土器群を、a式までの「タテ区画」から解放されたものと

鈴木 徳雄 (一九七九)		沈 線 文 系
	古 段 階	① 幅広平行線文 ② 木葉文・木葉状入組文 / 鋸歯状文 ③ 文様帯は口辺部に集中。下端を区画。 ④ 従来の系統上
	中 段 階	① 幅広平行線文 ② 風車状渦巻文、胴部には鋸歯状文 ③ 胴下半まで文様帯化。口縁部文様帯の完成。文様帯の多様化。一次区画文の盛行。 ④ キャリバー形（胴下半部よりゆるやかに外反し、口縁部に強い屈曲をもたない）
	新 段 階	① 集合沈線に近い密な平行線文 ② 風車状渦巻文のくずれ。一次区画文内を孤線文・タテ沈線等で充填施文。 ③ 口縁部屈曲による文様帯の分割 ④ キャリバー形（著しく外反し、口縁部で強く内屈）

		爪 形 文 系	浮 線 文 系	沈 線 文 系
中 島 宏	古 段 階	① 有 ② 鋸歯状線（空白部を縦線・弧線で埋める）/ 木葉状入組文と三角形の組合せ ③ 文様帯は拡大するが、一次区画線は胴部には及ばない。 ④ 外反 / 胴部がくびれる（大波状線）	① ナシ（但し古段階から新段階への移行期として、北前1住・御所1住の資料）	① 有 ② 鋸歯文・木葉文 ③ — ④ 外反 ⑤ 浅鉢・特殊列孔浅鉢有
	新 段 階	① ナシ	① 有 ② 「種々浮線文土器」とあるのみ ③ で、特に記載ナシ ④	① 有。原体の小径化・櫛状化 ② 風車状渦巻（口縁）、渦巻・弧状・く状（胴部） ③ 一次区画線の器全面施文化 ④ キャリバー形（口縁がく字状に屈曲する / 靴先状を呈する） ⑤ 幾可学文を有する列孔浅鉢の無文化

表8-6 その1 各研究者のb式細分案 (①文様の種類・有無 ②モチーフ ③文様帯 ④器形 ⑤備考)

捉え、施文順序を考慮した上で「変化可能な部分とそうでない部分」を明らかにして土器製作者の意識に迫ろうと試みた（鈴木徳雄1979）。その結果として、b式は、古段階・中段階・新段階の三段階に区分された。一方、中島は、東光寺裏遺跡出土の土器を考察するにあたり、連続爪形文段階（古）とそれ以降の段階（新）との二区分を採用した（中島19

鈴木 木 敏 昭		爪形文系	浮線文系	沈線文系
	b ₁	<ol style="list-style-type: none"> ① 有 ② 波状文・鋸歯状文。それによりできる空間には爪形文を縦に配す ③ 主文様帯はⅠ文様帯（口辺部文様帯）。Ⅱ文様帯（胴部文様帯）にはRLが横位回転施文 ④ 朝顔状に開く（扇形波状縁・平縁） 	<ol style="list-style-type: none"> ① ナシ 	<ol style="list-style-type: none"> ① 有 ② 木葉文・波状文？ ③ — ④ —
	b ₂ (古)	<ol style="list-style-type: none"> ① 一部残存 ② — ③ — ④ — 	<ol style="list-style-type: none"> ① 有（浮線上に刻み等が施されないもの、縄文が転がされるもの、丸棒状施文具による刻みが付加されるもの） ② 蕨手状・弧線文風 ③ Ⅰ文様帯に上記のモチーフ Ⅱ文様帯には横位浮線 ④ キャリバー状（口縁の内彎度弱、大山形状縁） ⑤ 獣面把手・口唇部の刻み目列有 	<ol style="list-style-type: none"> ① 有（盛行） ② 風車状渦巻文・蕨手状 ③ Ⅰ文様帯には上記のモチーフ Ⅱ文様帯には何段かの2～3組の平行沈線 ④ キャリバー状 ⑤ 瘤状・獣面把手有
	b ₂ (新)		<ol style="list-style-type: none"> ① 有（浮線上に矢羽根状の刻み目） ② 渦巻基調のモチーフ・弧線・波状 ③ b₂（古）に同じ ④ キャリバー状（内彎強・小波状縁） 	<ol style="list-style-type: none"> ① 有 ② — ③ 浮線文と同一展開 ④ —
	b ₃	<ol style="list-style-type: none"> ① ナシ 	<ol style="list-style-type: none"> ① 衰退（鋭く繊細な矢羽根状の刻みが加えられる） 	<ol style="list-style-type: none"> ① 有（集合沈線文） ② 入組状渦巻（Ⅰ-a、Ⅱ文様帯） 渦巻（Ⅰ-b文様帯） ③ Ⅰ文様帯が屈曲部を境に上下に分割。Ⅱ文様帯には集合条線による平行沈線文（但し上部には入組状渦巻が施文）。 ④ 「くつ先状」キャリバー形（4単位山形波状縁）

表8-6 その2 各研究者のb式細分案

		爪 形 文 系	浮 線 文 系	沈 線 文 系
今 村 啓 爾	b (古)	① 爪形文 / 爪形文と隆起線 ② 弧状・木葉形 ③ a式に近い(上・下限を区画) ④ a式に近い	① 有? (口縁の内彎の弱いもの、 浮線が太く浮線間の間隔の広いもの、 胴下半の水平方向の浮線が少ないものが古い)	① 有 (平行沈線文) ② } ③ } 爪形文系と共通 ④ }
		① ナシ	① 有 ② 渦巻 (口縁部) ③ 下限が不明確 ④ キャリバー形	① 有 (平行沈線文) ②③④ 浮線文系と共通 ⑤ 口縁の貼付文 (獣面が多い)
	b (新)	① ナシ	① 有。b式新段階の時間幅の中で急激に減少 (細く繊細な浮線) ② 数本一組で水平に加えられる ③ ——— ④ キャリバー形	① 有 (集中平行線文) ② 口縁部渦巻文の退化、胴部平行沈線間に渦巻文、縄文部と集合平行線が交互に帯状をなす。 ③ 下限の消滅 ④ ゆるやかに外反 (平縁) キャリバー形 (くの字形に内折) ⑤ 貼付文の発達 (外反する器形)

表 8-6 その3 各研究者のb式細分案

80)。これは従来のb式二分案の延長線上に位置するものである。このような研究をふまえた上で、鈴木敏昭は $b_1 \rightarrow b_2$ (古) $\rightarrow b_2$ (新) $\rightarrow b_3$ という4区分を提唱した (鈴木敏昭1980)。これは、器形と文様帯の変化とを関連づけながら、文様の変化を爪形文・浮線文・沈線文の全体にわたって捉えようとした試みである。b式の基本構造を「反対称」とし、それが崩れてゆく b_3 段階を文様構造の大変革期と捉えている。

これら埼玉県を中心とした研究とはやや傾向を異にするものとして、伊豆諸島を主たるフィールドとした今村の研究がある (今村1980)。鈴木徳雄と同様、三段階に細分しているが、その主たる分析対象は浮線文土器である。この研究は、最近発表された諸磯式の施文順序に関する研究 (今村1981) とあわせて理解されるべきであろう。

以上のように、各研究者間には名称・型式内容の不統一が存在する。また、本遺跡出土の土器には、これらの編年網には含まれない土器も多い。そのため、本遺跡出土土器に対して、安易に細分された型式名を用いることは、混乱を招く要因となりかねない。そこでここでは各氏の編年を念頭におきながら、出土土器の概括的な位置づけを試みる。

1類としたものの大部分は、諸磯b式の古い時期に位置づけられる。本類の中での新古関係は、器形・文様構成等によって決められる。196・198等は本類の中では新しい様相を示す。また、5類bとした連続爪形文も、b式の古い時期に比定される。

これに対し、2類aの大部分、b、d、及び5類aは、b式の新しい時期に相当する。

このうち、深鉢C形で沈線が集合沈線状となる一群が最も新しい様相を示す(215・216等)。2類aのうち、200・213、及び2類cとした205は、器形・文様構成等において本類の他の土器とはやや異なるが、施文具、施文方法から考えて同一時期の所産であろう。また、6類の浮線文土器は2類の沈線文土器と対応し、b式の新しい時期に比定される。

3類aは、器形・文様構成等から諸磯b式の可能性が高いが、広く浅い集合沈線は該期の沈線としては異質であり、更に検討を要する。

3類bについては、類例がなく、一応不明としておく。

4類a(221)は、b式期に出土例の多い小型の鉢である。本資料は、①胴部が「く」字状に屈曲する、②口縁部の断面は内面が次第に薄くなる片刃状を呈する、③文様は屈曲部に限られる、④内・外面とも丁寧に調整される、⑤胎土には精製された緻密な粘土が用いられる、等の諸特徴から、古和田台遺跡出土の赤色物塗彩土器No.1(和田1973)や針ヶ谷北通遺跡出土の赤色物塗彩土器(土肥1975)にきわめて類似する。但し、本遺跡例には赤色物塗彩はみられない。

4類c(223)は、他にあまり類例をみないが、施文具・施文方法から考えて、やはり諸磯b式に属するであろう。

5類b(208)は、西之台B地点(小田1980)、東光寺裏遺跡5号住(中島1980)に、2列の刺突による近似例があり、諸磯b式と思われる。

5類cは、貝殻文に類似した文様を有する点から、浮島系の可能性もあるが、貝殻背圧痕文は浮島式の文様構成要素にはみられない点から考えて、やはりb式の範疇で取り扱うべきであろう。

8類・9類は、b式の全般にわたる時間幅の中に位置づけられる。8類とした縄文のみの土器が多くみられることは、沈線文系土器の盛行とともに本遺跡の土器群の特徴である。b式の縄文は、一般に単節RLが多くみられるようであるが(中島1980等)、本遺跡においては無節Lの方が多くみられた。8・9類は、器形・文様の変化が少なく、細分は非常に困難である。但し、外反する口縁を有する231は古い時期に、内側に屈曲する口縁を有する175~177・180等は新しい時期に属するものであろう。

以上を概括すると、第3群とした土器群は、諸磯b式の新しい時期に属するものを中心として、b式期のほぼ全般にわたるものであると考えられる。

ここで注目されるのは、本遺跡における爪形文・浮線文の稀少性と沈線文土器の多量の出土である。沈線文系土器群は、従来の研究では主として爪形文・浮線文系土器群との組合せによって捉えられていた。しかし、本遺跡においては、これだけ多量の沈線文系土器が出土しながら、爪形文・浮線文を有する土器がほとんどみられない。もちろん、浮線文が衰退するb式の最も新しい時期には、沈線文系が該期の土器組成の主体をなすわけであるが、本遺跡の沈線文系土器は、前述のようにb式期の全般にわたるものであり、時期差を反映しているものとは考え難い。

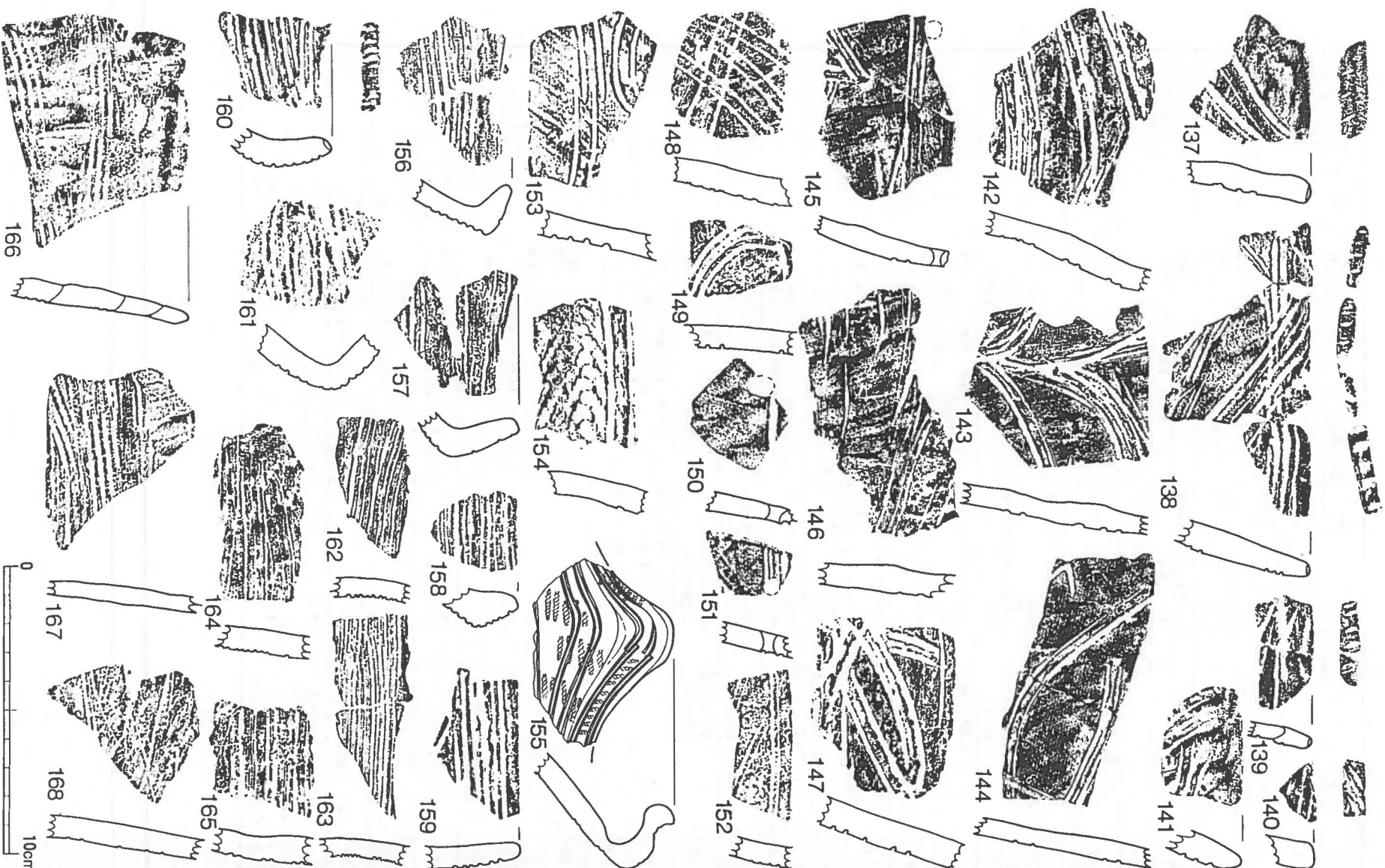
このような点からみて、本遺跡における沈線文系土器の盛行については、b式内の地域差を考慮せざるを得ないと思われる。諸磯式に関しては、種々の編年研究が存在するにも

かかわらず，地域差を詳しく論じた研究はきわめて少ない。本遺跡の資料は，従来の編年網では理解し得ない部分が多く，地域差を考える際の貴重な資料となろう。

近年の発掘数の増加にともない，諸磯期の遺跡発掘例も増加し，特に埼玉県ではb式に関する資料がかなり整ってきている。しかし，東京都，神奈川県下ではまとまった資料が意外に少なく，比較が困難である。今後の資料の増加が待たれる。 (羽生)

Table 6

番号	出土区	出土層 (レベル)	器形	部位	文様	状態					備考
						器厚	焼成	胎土	色調	調整	
137	B 2	下 (—)	深鉢	口	7mm幅の半截竹管による平行沈線。口唇部に刻み目	0.9	良	密 細砂・中礫を含む	にぶい褐 にぶい褐	ヨコナデ	同一個体
138	A 1	外 (10.391~11.225)	深鉢	口	5mm幅の半截竹管による平行沈線。口唇部に刻み目	0.8	良	密、多量の細砂・中礫を含む	暗褐 にぶい褐	ヨコナデ	
139	B 2	下 (10.582~10.470)	深鉢	口	外面の口縁部下の調整は不十分	0.8	良	密 多量の細砂を含む	暗褐 暗褐	ヨコナデ	
140	C 5	中 (11.203)		口	6mm幅の半截竹管による平行沈線。口唇部に縄文。	1.0	良	密 細砂を含む	褐 褐	ヨコナデ	同一個体
141	A 2	下 (11.007)	深鉢	口	5mm幅の半截竹管による平行沈線が不規則に斜行。	0.9	良	密 多量の細砂を含む	明赤褐 にぶい褐	指頭タテナデ ヨコナデ	
142	A 2	下 (10.805)	深鉢。口縁部付近の破片	胴	6mm幅の半截竹管による平行沈線が横走	0.9	良	密 多量の細砂を含む	にぶい褐 にぶい褐	ヨコナデ ヨコミガキ	
143	A 3	下 (11.257)		胴	6mm幅の半截竹管を用いた平行沈線による肋状文	0.9	良	密 多量の細砂を含む	にぶい赤褐 にぶい赤褐	タテナデ ヨコナデ	同一個体
144	A 3 B 3	下 (11.155~10.758)		胴	6mm幅の半截竹管を用いた平行沈線による曲線文	0.7	良	密 多量の細砂を含む	にぶい褐 にぶい褐	ナメミナデ ヨコナデ	
145	A 3	下 (10.849~10.858)		胴	6mm幅の半截竹管を用いた平行沈線が横走・斜行	0.8	良	密 細砂を含む	にぶい赤褐 にぶい褐	タテナデ ヨコミガキ	焼成後の穿孔をもつ
146	A 2	下 (11.087)		胴	約5mm幅の半截竹管により横走する平行沈線を施文	0.8	良	密 多量の粗砂を含む	にぶい赤褐 暗褐	ナメミガキ ヨコナデ	
147	D 5	下 (10.473)		胴	7mm幅の鋭い半截竹管による平行沈線を弧状に施文	1.0	良	密、多量の粗砂・小礫を含む	にぶい黄橙 灰黄	ヨコナデ	
148	B 4	中 (11.383)		胴	5mm幅の半截竹管による平行沈線が交叉するように斜行	0.9	良	密、多量の細砂・光沢のある砂粒を含む	にぶい赤褐 にぶい黄褐	タテナデ	
149	A 1	外 (11.287)		胴	5mm幅の半截竹管による2条の平行沈線を用いた曲線	0.8	良	密 多量の粗砂を含む	にぶい黄褐 にぶい黄褐		
150	A 3	外 (11.257)		胴	半截竹管による平行沈線が1条横走	0.7	良	密 多量の細砂を含む	にぶい褐 にぶい褐	タテナデ ヨコナデ	
151	A 1	外 (11.149)		胴	8mm幅の半截竹管による平行沈線が1条横走	0.7	普通	密 多量の細砂を含む	にぶい褐 明褐		
152	B 5	下 (11.295)		胴	3mm幅の半截竹管による平行沈線が横走・斜行	0.7	良	密 細砂を含む	にぶい黄褐 にぶい黄褐	タテナデ	
153	E 6	外 (10.160)		胴	無節しぼ縄文+横走・渦巻状平行沈線	0.8	良	密 細砂を含む	にぶい褐 にぶい褐	ヨコナデ	
154	D 3	中 (10.044)		胴	羽状縄文+8mm幅の半截竹管による平行沈線	0.7	良	密 細砂・中礫を含む	にぶい赤褐 にぶい褐		
155	C 4	下 (10.611)	波状線深鉢。 キャリバー形	口	単節R(1)縄文+3mm幅の半截竹管による平行沈線	0.7	良	密、多量の細砂・小礫を含む	灰褐 灰褐	ヨコミガキ	同一個体
156	A 4	中 (10.588)	波状線深鉢。 キャリバー形	口	半截竹管による横走平行沈線を集合沈線状に施文。	1.0	良	密 細砂・小礫を含む	にぶい褐 にぶい褐	ヨコミガキ	
157	B 4	中 (11.378)	波状線深鉢。 キャリバー形	口	半截竹管による粗雑な平行沈線が横走	1.0	良	密 細砂・小礫を含む	にぶい橙 にぶい橙	ヨコミガキ	
158	E 6	中 (10.362)		口	半截竹管による平行沈線を集合条線状に施文	1.3	良	密 細砂・小礫を含む	にぶい黄橙 灰黄褐		
159	A 1	外 (11.515)		口	半截竹管による平行沈線を集合条線状に施文。	0.8	良	密 多量の粗砂を含む	暗褐 灰黄褐	ヨコナデ	
160	B 5	下 (—)	波状線深鉢。	口	半截竹管による平行沈線を集合沈線状に施文。口唇に刻み。	1.1	良	密 細砂・小礫を含む	にぶい赤褐 にぶい赤褐	ヨコミガキ	同一個体
161	C 5	中 (11.365~11.390)		胴	半截竹管による平行沈線を集合沈線状に施文	0.9	良	密 細砂・小礫を含む	にぶい赤褐 にぶい褐	ヨコナデ	
162	B 4	下 (10.613)		胴	半截竹管による平行沈線が集合沈線状に横走	0.6	良	密 混入物は少ない	にぶい褐 赤褐	タテミガキ	同一個体
163	B 4	下 (10.870~10.678)		胴	半截竹管による平行沈線が集合沈線状に横走	0.7	良	密 混入物は少ない	暗赤褐 にぶい赤褐	ヨコミガキ	
164	A 2	下 (10.978)		胴	約5mm幅の半截竹管を用いた平行沈線を粗雑に横位施文	0.8	良	密 多量の粗砂を含む	にぶい褐 にぶい褐	ヨコナデ	
165	A 2	下 (11.262)		胴	約5mm幅の半截竹管を用いた平行沈線を粗雑に横位施文	1.0	良	密 多量の粗砂を含む	にぶい褐 にぶい褐	ヨコナデ	
166	B 5	外 (—)		口	条痕状の平行沈線	0.8	良	密 多量の粗砂を含む	にぶい黄褐 明赤褐	タテナデ ヨコナデ	同一個体
167	B 4	下 (11.386)		胴	条痕状の平行沈線	0.6	良	密 多量の粗砂を含む	にぶい黄褐 明赤褐	タテナデ ヨコナデ	
168	A 2	下 (11.476)		胴	鋭利な工具による沈線を不規則に施文	0.8	良	密 少量の細砂を含む	にぶい赤褐 にぶい赤褐	タテナデ ヨコナデ	



縄文時代前期の土器(5)

Table 7

番号	出土区	出土層 (レベル)	器形	部位	文様	状態					備考
						器厚	焼成	胎土	色調	調整	
169	C 5	中 (10.815)		胴	櫛歯状工具の押し引きによる目盛押印痕状文	0.8	良	密 細砂を含む	褐灰 褐灰		
170	F	中 (—)		胴	櫛歯状工具と考えられる施文具による押し引き文	0.7	良	密 多量の細砂を含む	暗褐 にぶい赤褐		
171	B 5	F (11.150)		胴	櫛歯状工具と考えられる施文具による押し引き文	0.6	普通	密 多量の細砂を含む	にぶい赤褐 にぶい赤褐		
172	B 1	上 (11.463)		胴	円形の連続爪形文+放射状沈線と爪形文	1.0	良	密 細砂・小礫を含む	にぶい赤褐 にぶい橙		
173	B 4 E 5	F (10.902～9.564)		胴	単節 R 1/2 横位回転縄文+一時の矢羽状浮線文	1.0	良	密 細砂・中礫を含む	にぶい黄橙 にぶい黄橙	ヨコナデ	
174	C 2 D 2	F (10.657～10.134)	深鉢。角棒状口縁	口	細かな単節 R 1/2 縄文を横位回転施文	0.7	良	密 少量の細砂を含む	にぶい赤褐 明赤褐	ヨコミガキ	
175	A 2	下 (11.022)	波状縁深鉢。丸棒状口縁	口	単節 R 1/2 縄文を横位回転施文	1.1	良	密 多量の細砂を含む	にぶい橙 褐灰	ヨコミガキ	
176	A 2	外 (11.054)	深鉢。外片刀状口縁	口	単節 R 1/2 縄文を横位回転施文	1.0	良	密、多量の細砂・中礫を含む	灰黄褐 灰黄褐	ヨコミガキ	
177	—	上 (—)	深鉢。丸棒状口縁	口	単節 R 1/2 縄文を横位回転施文	1.2	普通	密、細砂・中礫を含む	にぶい黄橙 にぶい黄褐	ヨコナデ	
178	E 5	F (10.175)		胴	単節 R 1/2 縄文を斜位回転施文	0.6	良	密 細砂を含む	にぶい赤褐 灰褐	タテナデ	
179	C 6	F (11.156)		胴	単節 R 1/2 縄文を横位回転施文	0.7	良	密、少量の細砂・小礫を含む	暗赤灰 にぶい褐	ヨコナデ	
180	D 5	F (10.142～10.403)	波状縁深鉢。内片刀状口縁	口	無節 L 1/2 縄文を横位回転施文	1.0	良	密、少量の細砂・中礫を含む	にぶい橙 にぶい暗赤	ヨコミガキ	
181	B 4 C 4	F (10.345～10.960)	平縁深鉢。角棒状口縁	口	無節 L 1/2 縄文を横位回転施文	0.8	良	密 多量の粗砂を含む	黒褐 灰黄褐	ヨコナデ	
182	B 4	F (11.010)	深鉢。丸棒状口縁	口	無節 L 1/2 縄文を横位回転施文	0.8	良	密 細砂を含む	灰黄褐 灰黄褐	ヨコミガキ	補修孔をもつ
183	D 7	中 (—)	深鉢。口唇部を薄く作る	口	燃りのゆらい無節 L 1/2 縄文を横位回転施文	0.8	良	密、細砂・中礫を含む	にぶい橙 にぶい橙	タテミガキ	
184	E 5	F (9.765)		胴	燃りのゆらい無節 L 1/2 縄文を斜位回転施文	0.8	良	密、多量の粗砂・小礫を含む	にぶい褐 黒	ヨコナデ	
185	E 5	F (10.052)		胴	燃りのゆらい無節 R 1/2 縄文を斜位回転施文	0.7	良	密 多量の細砂を含む	にぶい褐 にぶい褐	タテナデ ヨコナデ	
186	B 2	F (10.817～10.867)		胴		1.0	良	密、多量の細砂・少量の中礫を含む	にぶい褐 にぶい黄褐	ヨコナデ タテナデ	同一個体
187	A 2	中 (—)		胴		0.9	良	密 多量の細砂を含む	にぶい黄褐 灰黄褐	ナデ	
188	E 4	F (9.333)		胴		0.9	良	密 少量の細砂を含む	にぶい褐 灰褐	タテミガキ	
189	E 5	F (10.127)	深鉢	口	無文。口唇部に丸棒状工具による刻み目	0.7	良	密 細砂を含む	にぶい赤褐 にぶい赤褐	ヨコナデ ヨコミガキ	
190	A 3	F (11.178～10.894)	波状縁深鉢。丸棒状口縁	口	無文	0.9	良	密 多量の細砂を含む	褐灰 にぶい褐	ヨコナデ ヨコナデ	
191	E 3	下 (9.493～9.553)	平縁深鉢。口縁部は段状	口	無文	0.8	良	密 多量の細砂を含む	褐灰 にぶい黄橙	指頭タテナデ ヨコナデ	
192	C 4	F (10.746)	平縁深鉢。口縁部は段状	口	無文	0.8	良	密 細砂を含む	にぶい赤褐 にぶい赤褐	タテナデ ヨコナデ	
193	A 3 B 3	下 (11.331～10.917)	平縁深鉢。口縁部は段状	口	無文	0.9	良	密 細砂を含む	灰褐 灰褐	指頭押印 ヨコナデ	

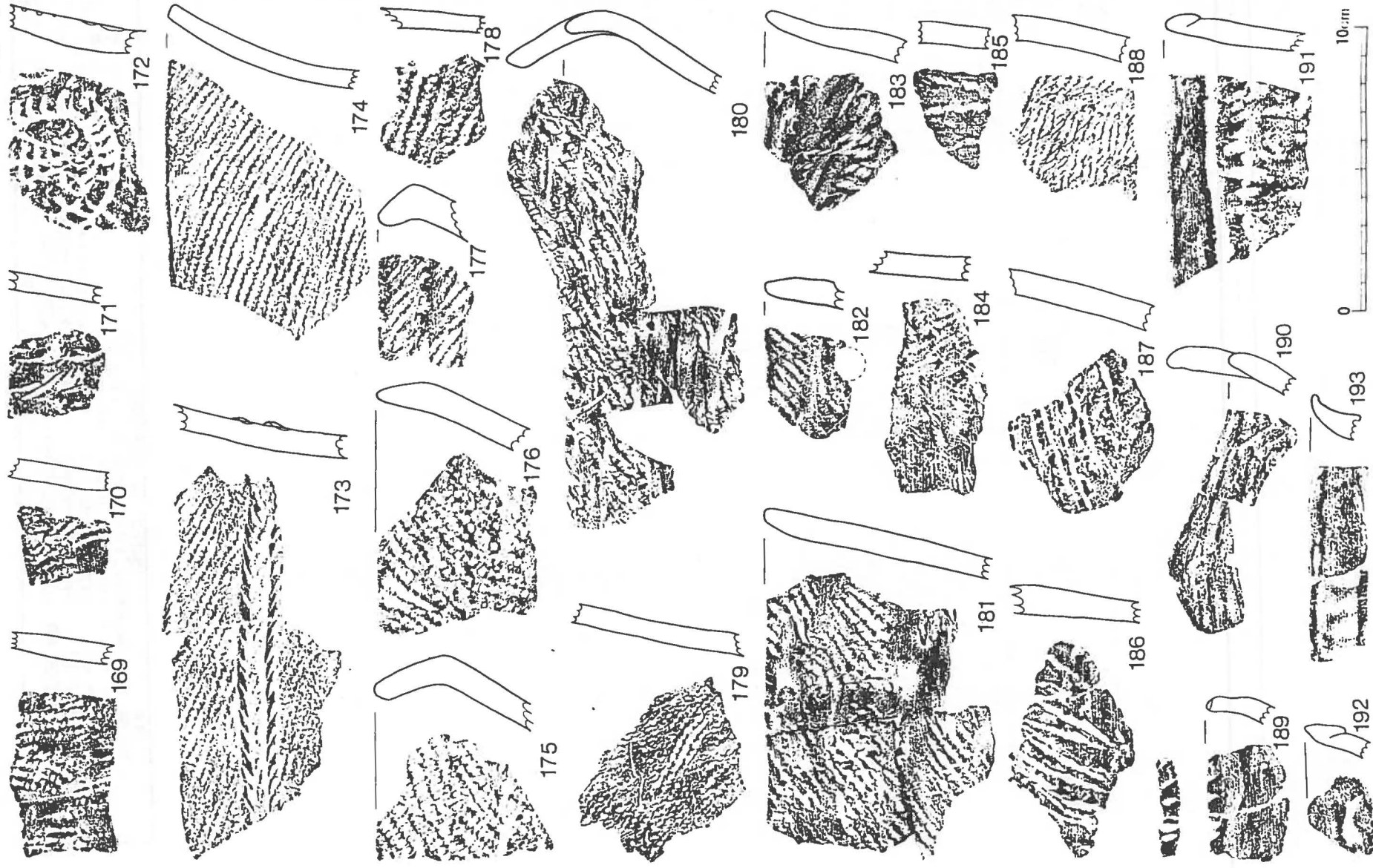
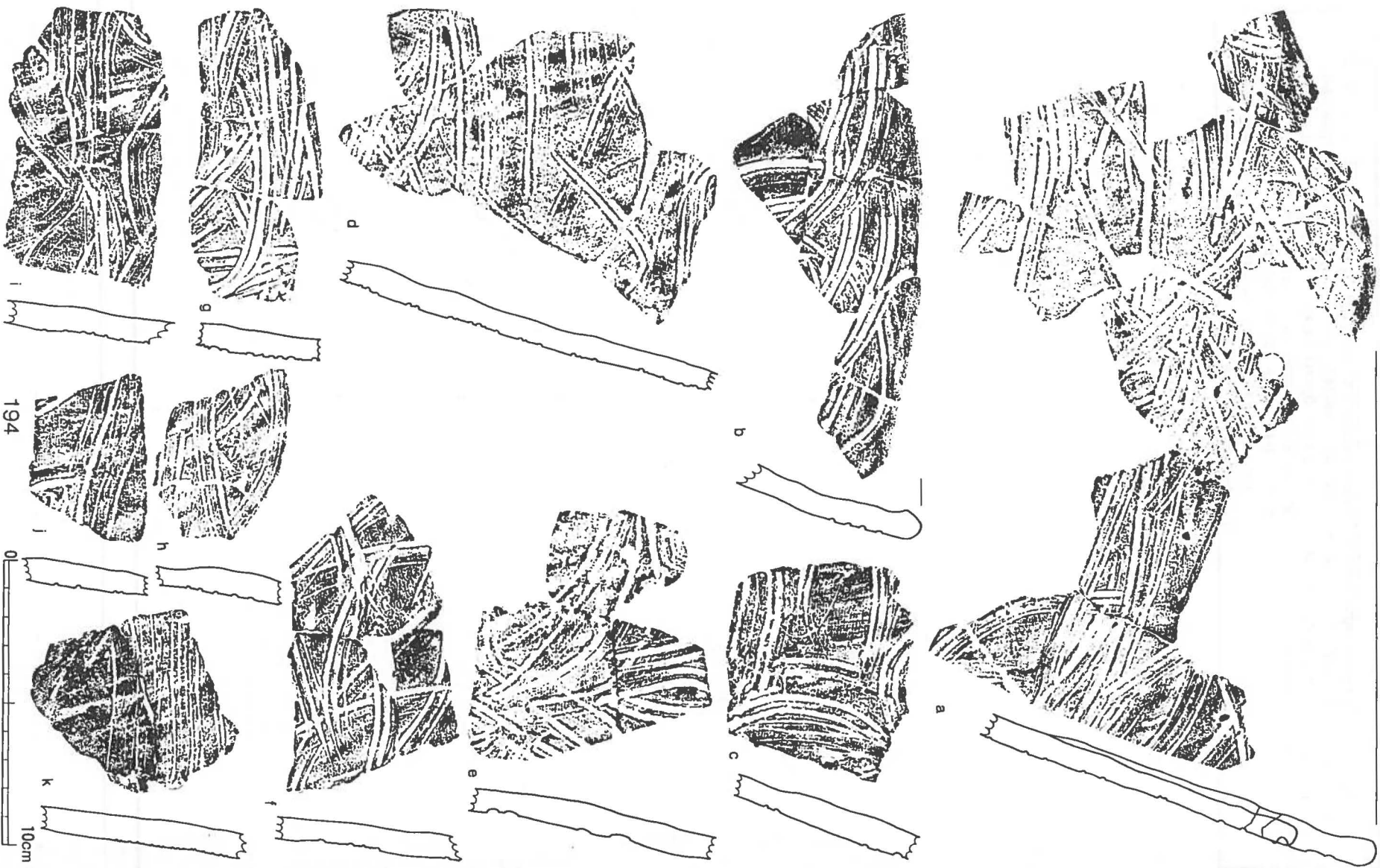


Table 8

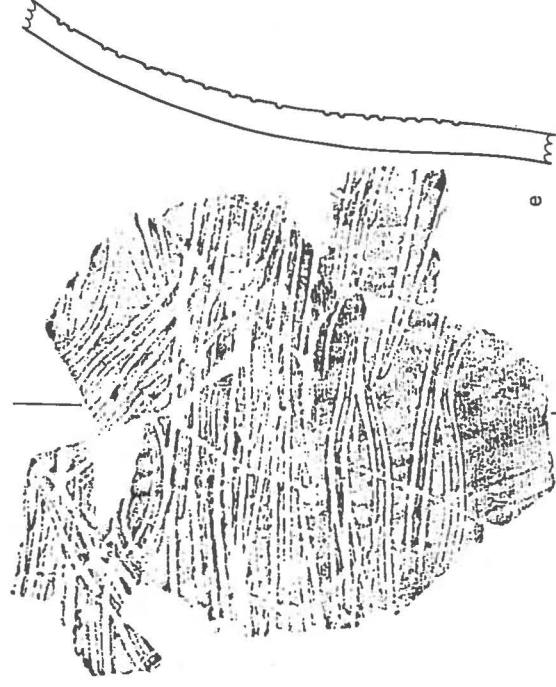
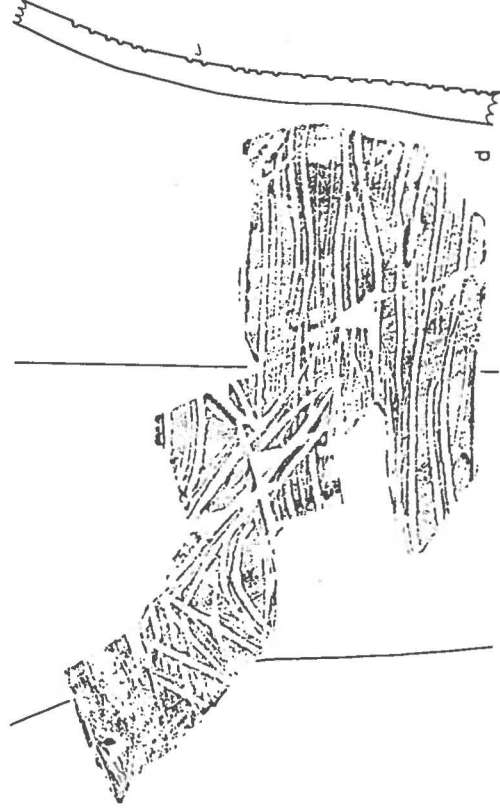
番号	法 量	器 形	文 様	状 態
194	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。底部から口縁部に向って、ほぼ直線的に開くと考えられる。口縁は緩かな屈形の波状をなす。	7～8mm幅の半截竹管による平行沈線を用いて、器面全体に施文される。沈線は底部付近では横走するが、口縁部～胴上半部にかけては、粗雑な木葉文状のモチーフが充填される。沈線は太く、部分的には単一となる。口縁下に一对の補修孔がみられる。外面は縦方向のナデ、内面は横方向のナデによる調整。	出土層 上・中・下・外 残 存 口縁部・胴部 焼 成 普通 胎 土 密、粗砂を含む 色 調 橙・黒褐 黄褐



縄文時代前期の土器(7)

Table 9

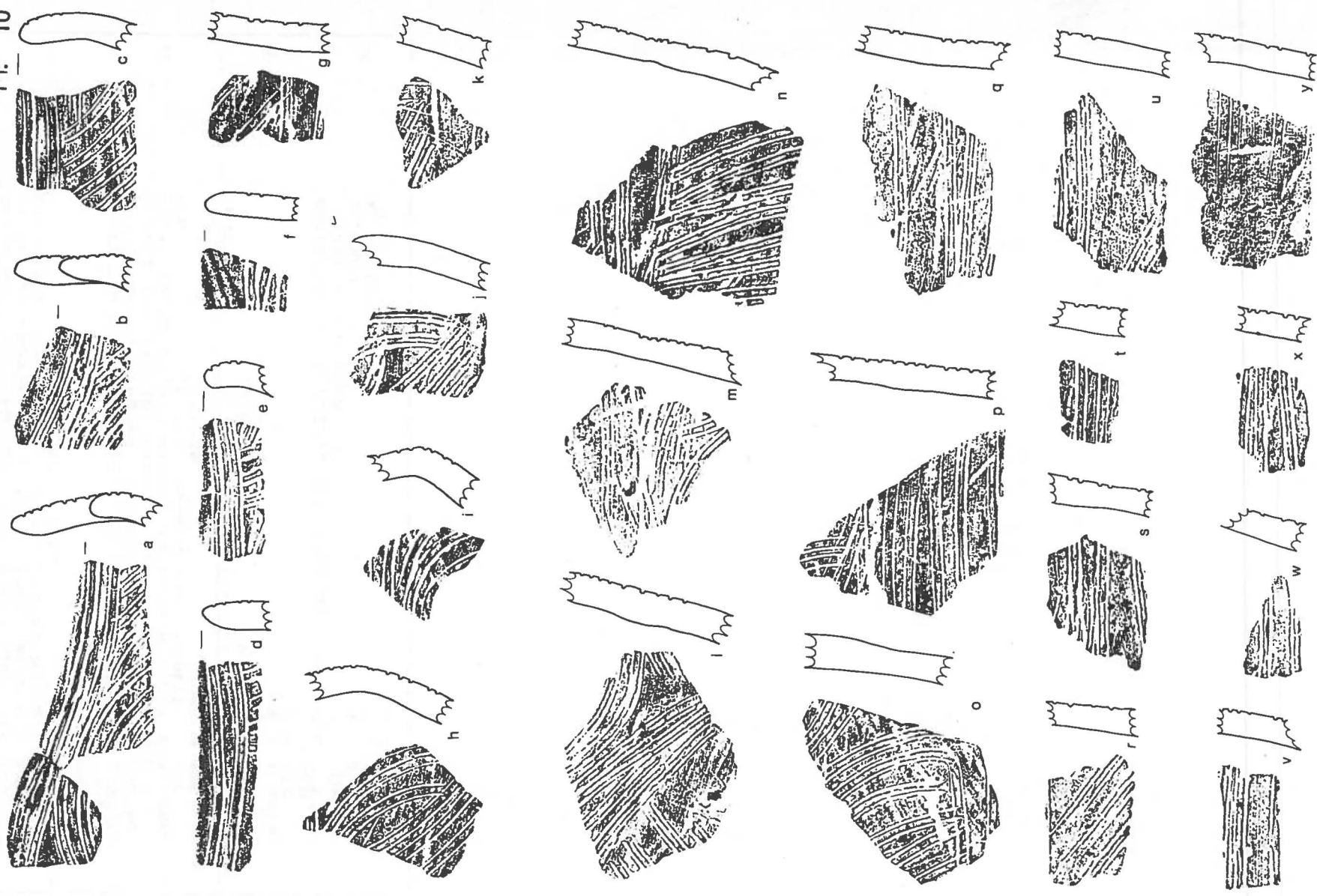
番号	法 量	器 形	文 様	状 態
195	口 径 — 底 径 — 最大径 (21.2) 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。胴部から口縁部に 向って緩かに外反し、口縁部で やや内弯気味に立上る。口縁は 山形波状縁。	5mm幅の半截竹管による平行沈線を用いて、器面全体 に文様を施す。沈線が横走・斜行することにより三角 形の区画帯を作り、区画内を木葉文状のモチーフで充 填させる。胴下半部では沈線は横走し、底部付近は無 文になる。外面は、口縁部は縦方向、胴部は横方向の ナデ調整。内面は横方向の雑なナデによる調整がなさ れ、輪轆み痕のみられる部分がある。	出土層 上・中・下・外 残 存 口縁部・胴部 焼 成 良 胎 土 密 色 調 明褐～暗赤灰 赤褐



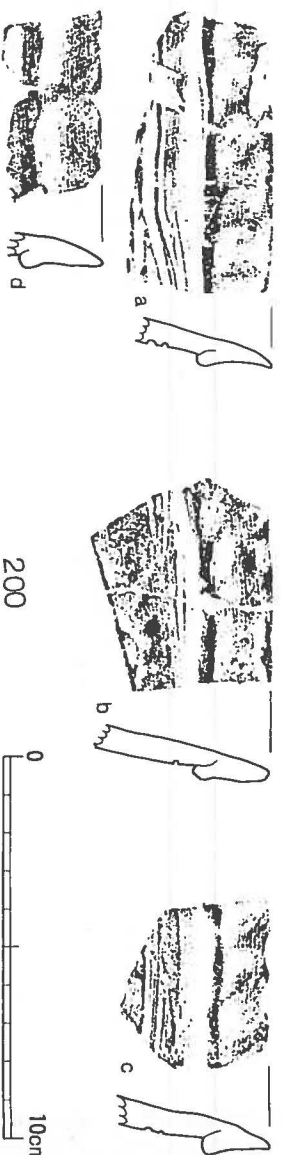
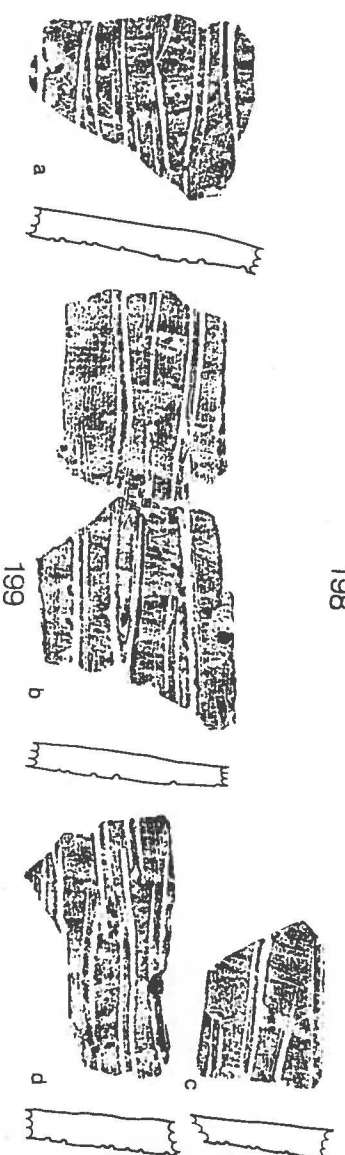
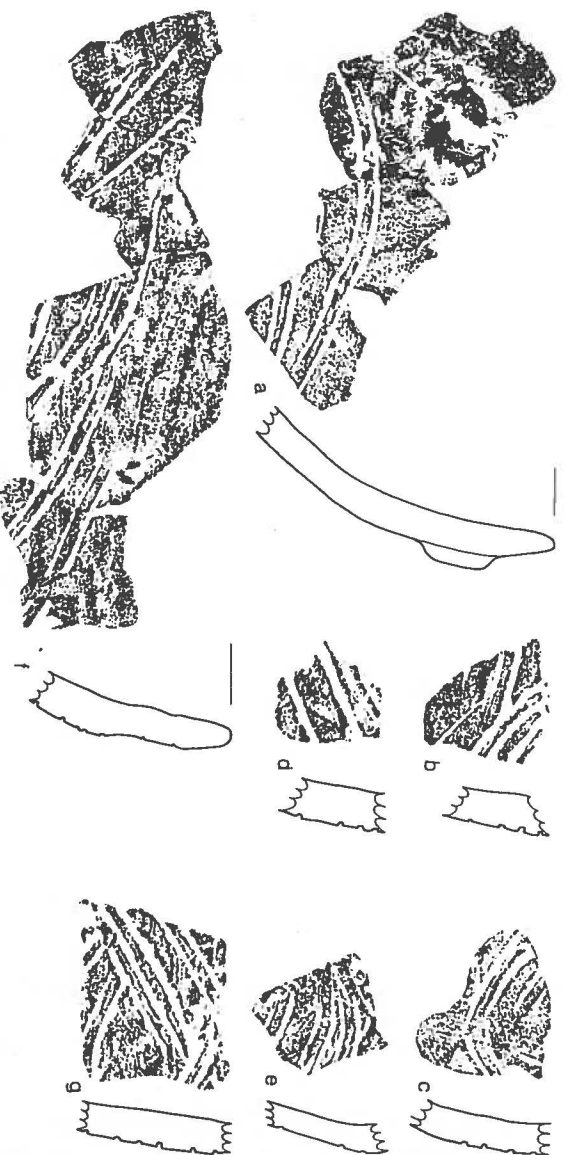
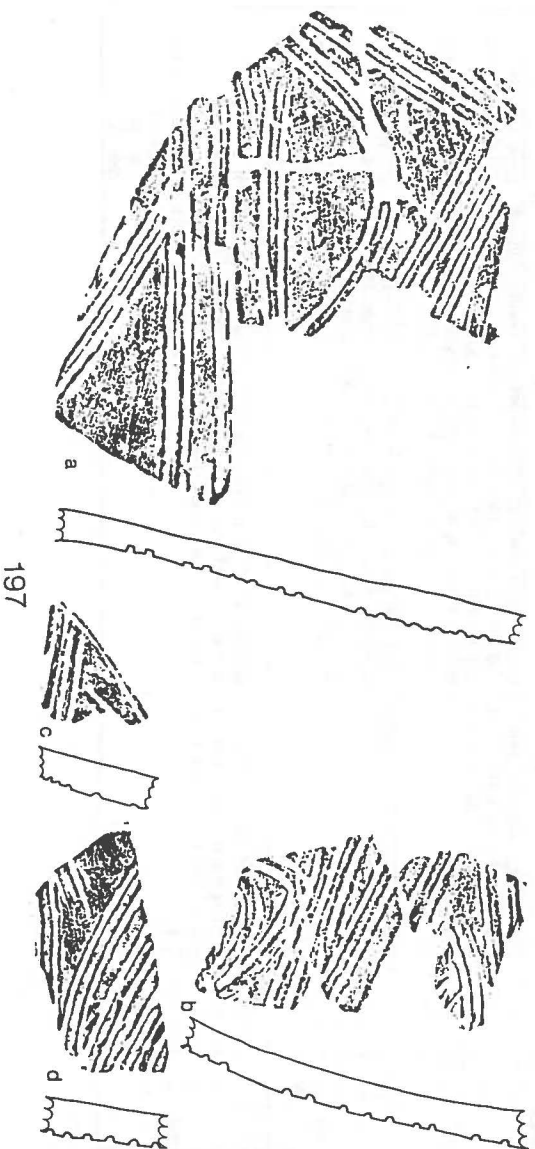
縄文時代前期の土器(8)

Table 10

番号	法 量	器 形	文 様	状 態
196	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。胴部から口縁部に 向って、ほとんどくびれず緩か に外反し、口縁部でやや内弯気 味に立上がるものと考えられる。 口縁は緩かな波状縁。	4～5mmの鋭利な半截竹管による平行沈線によって、 器面全体に文様が施される。口縁部に沿って、2条の 平行沈線が横走り、それより下の部位は斜行・弧状沈 線によって施文される。胴下半部には横走沈線のみが 施される。	出土層 下・外 残 存 口縁部・胴部 焼 成 良 胎 土 密、粗砂と少量の中礫 色 調 明褐～黒褐 明褐～灰褐



番号	法 量	器 形	文 様	備 考
197	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。胴部から口縁部に向って緩かに外反し、朝顔形を呈すると考えられる。	6mm幅の半截竹管による平行沈線が横走ないし斜行することによって三角形の区画帯を構成し、区画内に木葉文状のモチーフが充填される。内面は横方向のナデ、外面は縦方向のナデによる調整。	出土層 中・下 残 存 胴部 焼 成 普通 胎 土 密、多量の粗砂・中礫を含む 色 調 にぶい黄橙にぶい黄橙
198	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。底部から胴上半部にかけて緩かに開き、口縁部で内弯気味に立上る器形を呈するものと考えられる。口縁は山形起伏縁。	5mm幅の半截竹管による平行沈線を用いて弧線文・斜行線文を施す。沈線の施文はやや粗雑になされ、平行沈線の一方の条が消えている部分がある。波頂部下に径2cmの瘤状突起を貼付する。外面は横方向のナデ調整。内面は、口縁部は横方向に研磨され、胴部は横方向のナデ調整。	出土層 上・中・下・外 残 存 口縁部・胴部 焼 成 良 胎 土 密、多量の粗砂・小礫を含む 色 調 明赤褐
199	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。	3～4mm幅の半截竹管による平行沈線が横走する。施文は雑である。外面は縦方向のナデ、内面は縦位・横位の粗いミガキによる調整。	出土層 上・中・下・外 残 存 胴部 焼 成 良 胎 土 密、細砂を含む 色 調 明赤褐
200	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。口縁は平縁であり、口縁部は非常に薄く作られ、指頭による整形痕がみられる。口縁部は、輪値みを利用し段状に成形される。	5mm幅の半截竹管による平行沈線が横走する。施文は粗雑である。	出土層 中・下 残 存 口縁部 焼 成 良 胎 土 密、細砂を含む 色 調 明赤褐

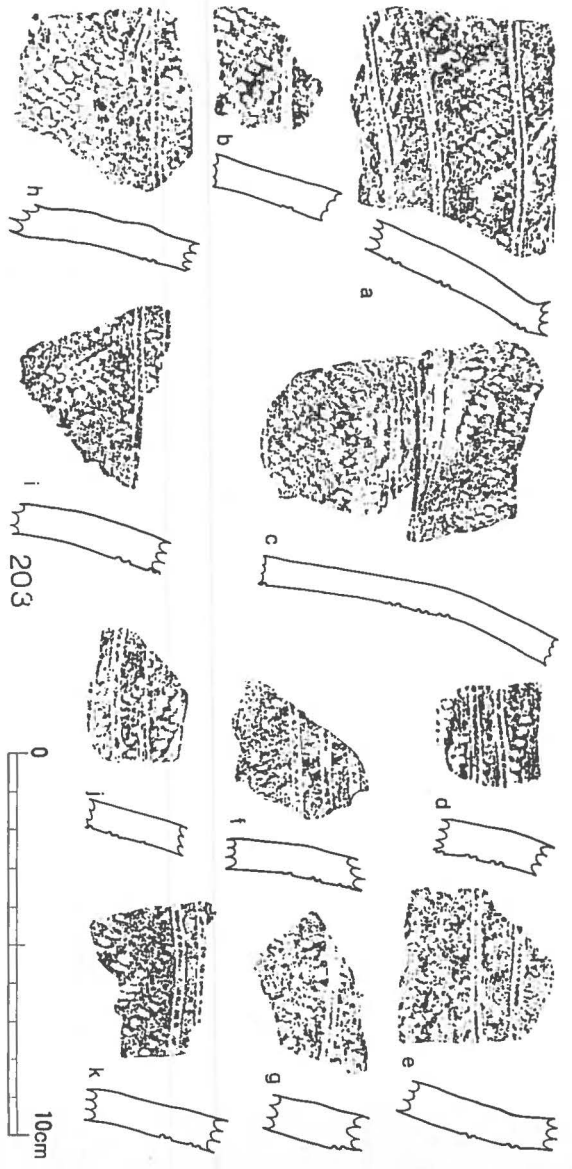
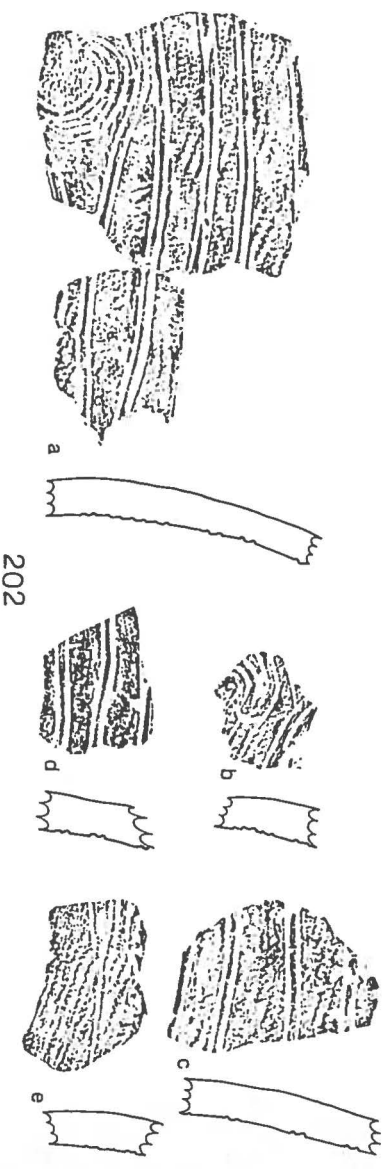
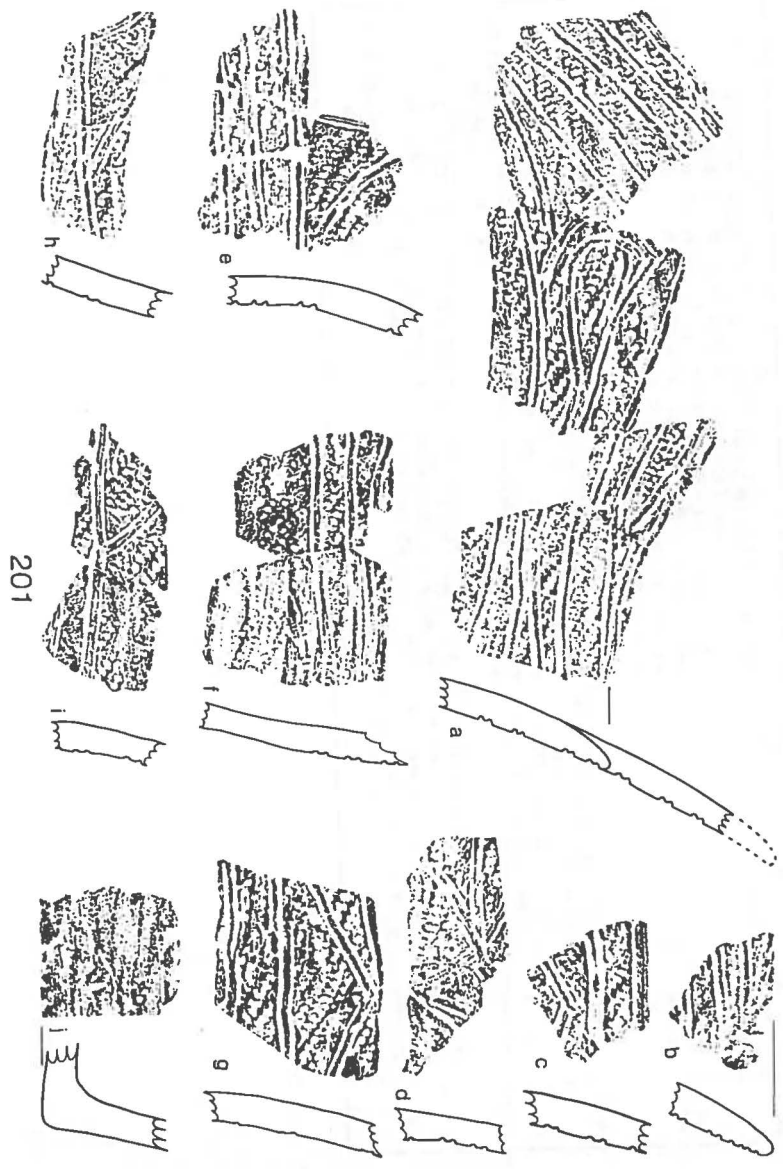


0 10cm

縄文時代前期の土器(10)

Table 12

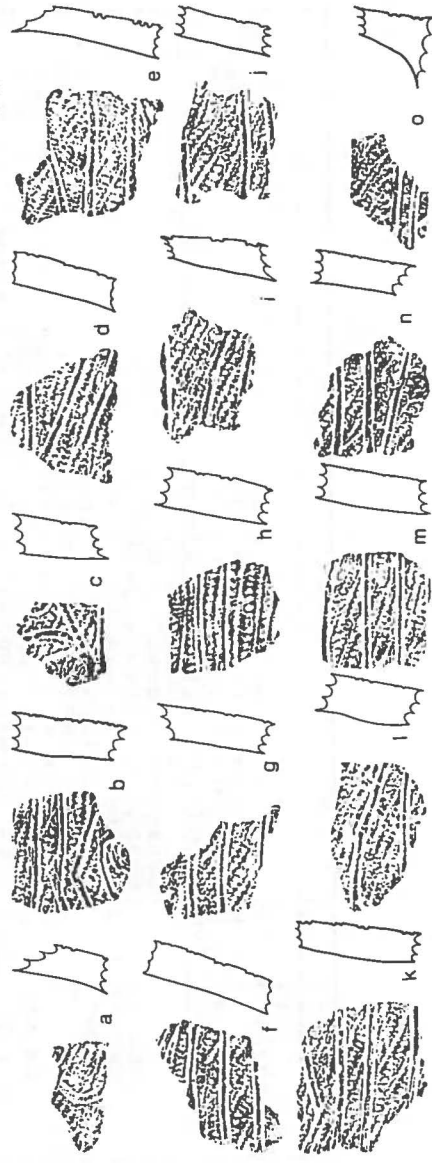
番号	法 量	器 形	文 様	備 考
201	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。胴部から口縁部に向って外反する朝顔形を呈すると思われる。口縁は山形波状線をなす。	単節Rに縄文を器面全面に横位回転施文し、4mm幅の半截竹管による平行沈線がその上に施文される。沈線は横走・斜行して三角形の区画帯を作り、区画内に曲線による意匠文が充填される。内面は、口縁部では横方向のミガキ、胴部では縦方向のナデによる調整。	出土層 上・中・下・外 残 存 口縁部・胴部・底部 焼 成 良 胎 土 密、細砂・小礫を含む 色 調 明赤褐～にぶい褐 暗赤褐～黒褐
202	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。外反する胴部破片のみ。	単節Rに縄文を横位回転施文させ地文とし、3～4mm幅の半截竹管による平行沈線が施文される。沈線は横走ないしは斜行して区画帯を作り、区画内には渦巻文が充填される。内面はほとんど調整されない。	出土層 下・下・外 残 存 胴部 焼 成 良 胎 土 やや粗、多量の細砂・中礫を含む 色 調 暗褐～にぶい黄褐 褐～明褐
203	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。胴部から外反しつつ口縁部下最大径部分に続くキヤリバー形を呈すると思われる。	横位回転施文の単節Rに縄文を地文とし、3mm幅の半截竹管による平行沈線が横走する。内面は、口縁部では横方向のミガキ、胴部では縦方向のナデによる調整。	出土層 中・下・外 残 存 胴部 焼 成 良 胎 土 密、粗砂および少量の中礫を含む 色 調 黒褐～褐 黒褐～褐



縄文時代前期の土器(11)

Table 13

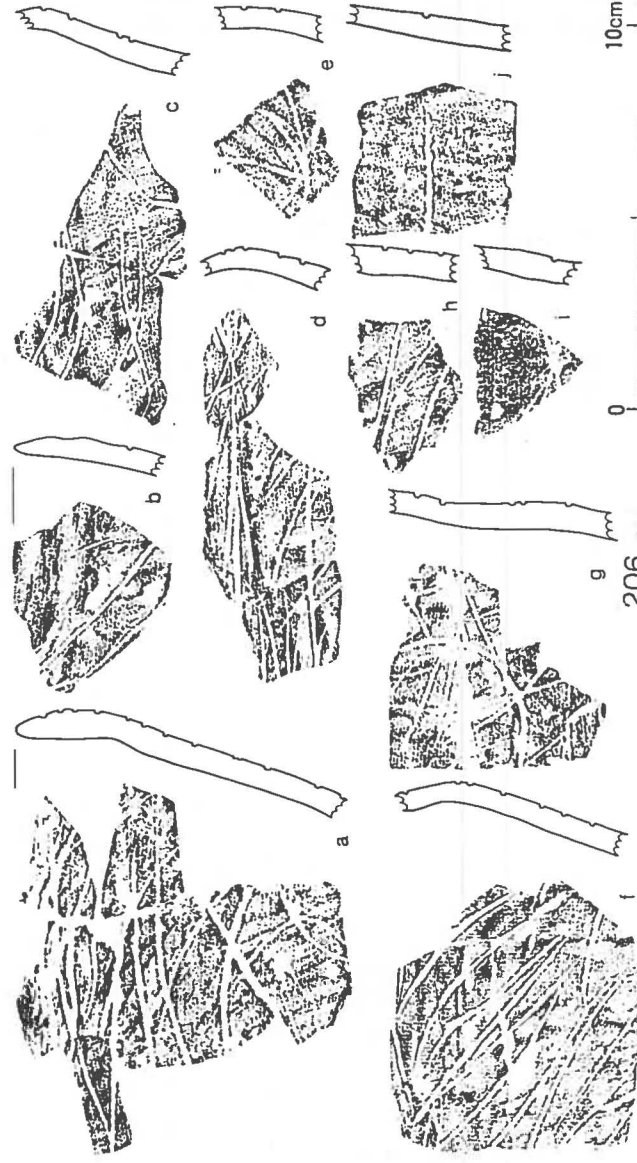
番号	法 量	器 形	文 様	備 考
204	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。	非常に細かい単節R位縄文を横位回転施文し地文とする。その上に3mm幅の半截竹管による平行沈線が施文される。沈線は、横走・斜行して区画帯をつくり、区画内には渦巻文が充填されると考えられる。横走沈線は底部直上まで施文される。内面は、横方向の雑なナデによる調整。	出土層 上・中・下・外 残 存 胴部・底部 焼 成 良 胎 土 密、粗砂および少量の中礫を含む 色 調 明褐～褐 暗褐
205	口 径 — 底 径 (16.8) 最大径 — 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。底部が突出し、胴部がきわめて緩かに彎曲するが、全体的にはほぼ直線的に開きつつ口縁部に至る器形をなすと考えられる。	4mm幅の半截竹管による平行沈線が横走し、口縁部下・胴部に同一施文具による2列の刺突が横位にめぐる。刺突は右方向から行われる。胴下半部は無文。器面調整は内外とも、口縁部は横方向、胴部は縦方向のミカキによる。	出土層 中・下・外 残 存 口縁部・胴部・底部 焼 成 良 胎 土 密、細砂・小礫を含む 色 調 にぶい橙
206	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。胴部から口縁部に向って緩かに外反し、最大径をもつ口縁部下でやや内屈する小型で薄手の土器。口縁は緩かな波状をなし、口縁部は薄く作られる。	太さ1～2mmの鋭利な工具による沈線が器面全体に不規則に施文される。外面は縦方向のナデ、内面は横方向のナデによる調整が施されるが、部分的に輪積痕がみられる。	出土層 中・下・外 残 存 口縁部・胴部 焼 成 普通 胎 土 密、多量の細砂を含む 色 調 暗褐～明褐 明褐～褐



204

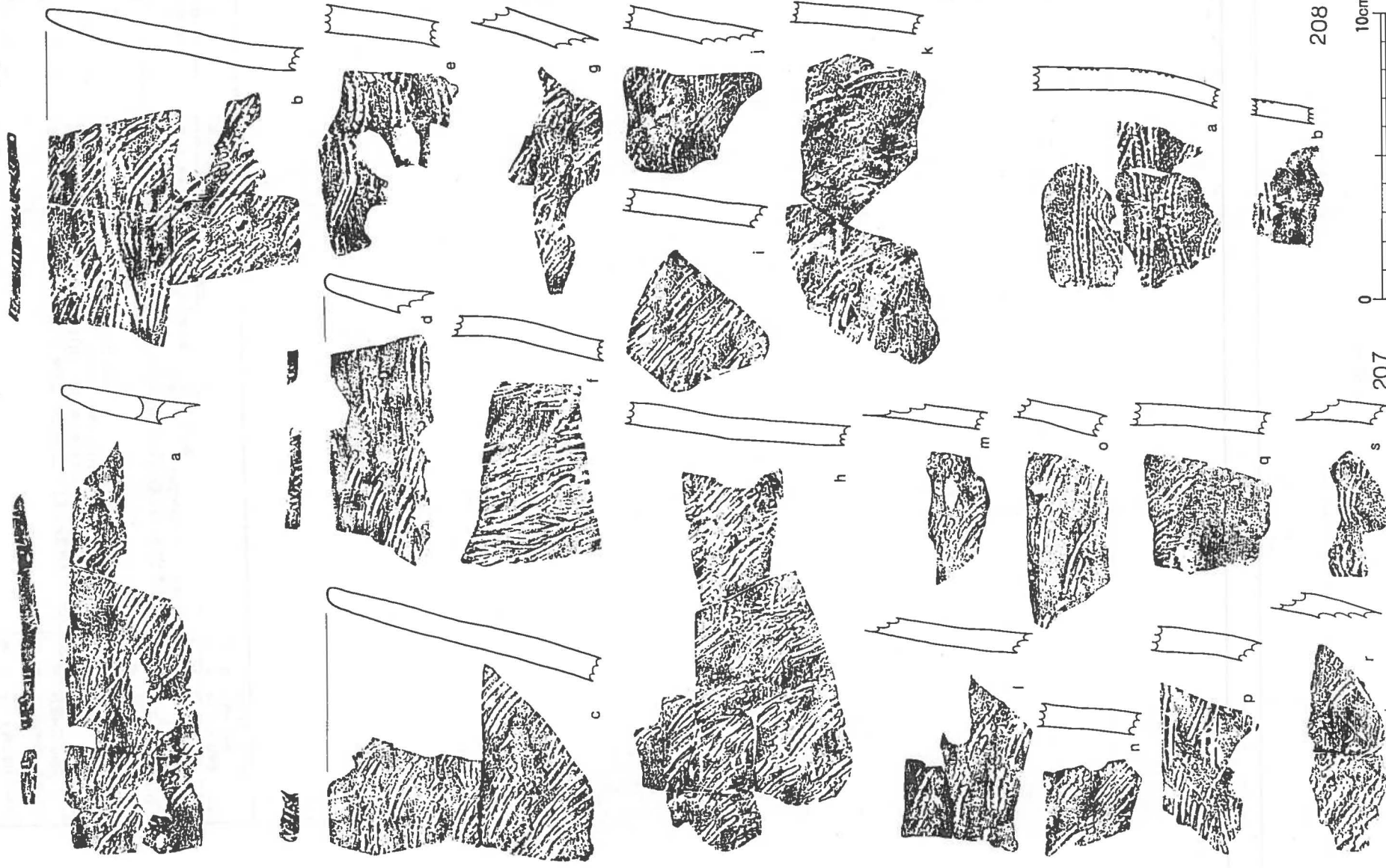


205



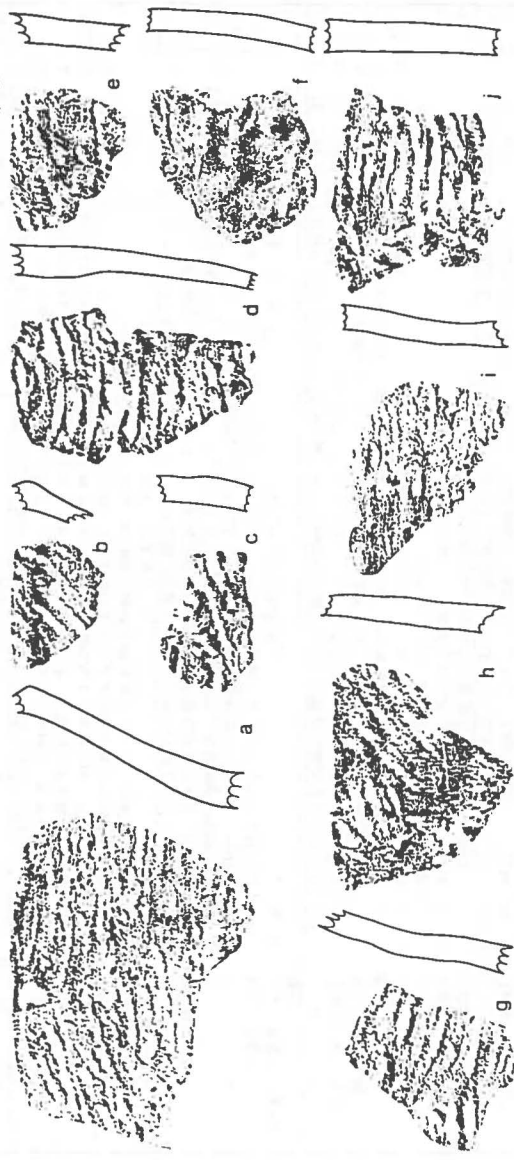
206

番号	法 量	器 形	文 様	備 考
207	口 径 —	深鉢形土器。底部から口縁部に 向って、ほぼ直線的に開く器形 であろう。口縁は平縁。	器面全体に貝殻背圧痕状の文様が施される。櫛歯状工 具の押し引き・引きずりによるものであろう。櫛歯は 主として3本を1単位としている。また、部分的には 貝殻背面による押圧施文がなされている可能性がある。 口縁部には、外面と同一と考えられる施文具による刻 み目をもつ。外面は横方向のナデによって調整される が、器面の剥落がみられる部分もある。割れ方も剥離 に近い状態である。内面調整は、口縁部では横方向の 粗いミガキ、胴部は横方向のナデによる。	出土層 上・中・下・外
	底 径 —			残 存 口縁部・胴部
	最大径 —			焼 成 良
	器 高 —			胎 土 密
	容 量 —			少量の細砂を含む 色 調 黒褐～灰黄褐 灰黄～明黄褐
208	口 径 —	深鉢形土器と考えられる。	櫛歯状工具と考えられる施文具を用いて、3列の刺突 によって三角形および弧状のモチーフを描く。刺突の 方向は一定していない。外面は縦方向のミガキ、内面 は横方向のナデによって調整されている。	出土層 上・下
	底 径 —			残 存 胴部
	最大径 —			焼 成 良
	器 高 —			胎 土 密、多量の粗砂・中砂 を含む
	容 量 —			色 調 濃い赤褐 濃い黄褐

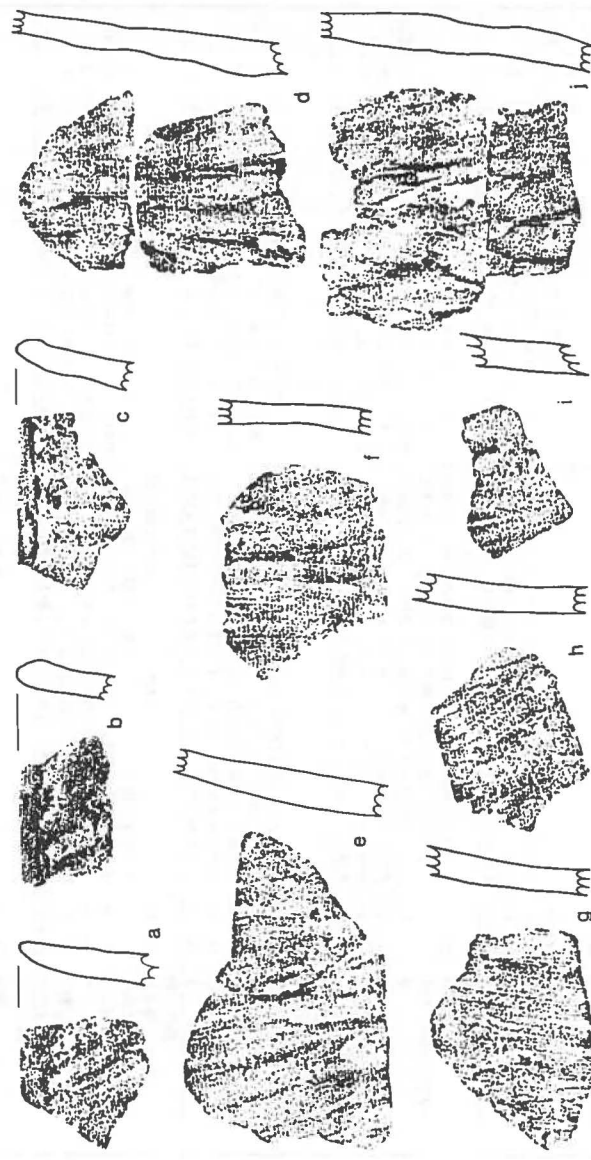


縄文時代前期の土器(13)

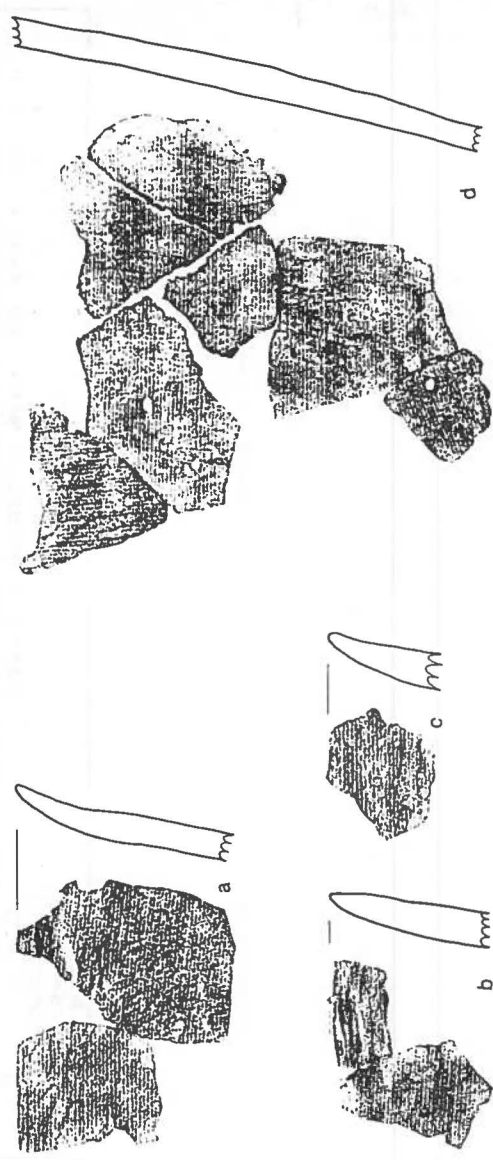
番号	法	量	器	形	文	様	状	態
209	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	— — — — —	深鉢形土器。胴部が外反し、口縁部下にある最大径部分で内屈して口縁部に至る。キャリパー形を呈すると考えられる。	— — — — —	器面全面に無節しじ縄文を、主として斜位回転施文する。条間にはやや間隔がある。内面は、横方向のナデによる調整。	— — — — —	出土層 中・外 残 存 胴部 焼 成 普通 胎 土 密、多量の粗砂と中礫を含む 色 調 にぶい赤褐～明赤褐 暗赤褐～赤褐	
210	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	— — — — —	深鉢形土器。底部から口縁部に向ってやや外傾する小型深鉢と考えられる。口縁は平縁。	— — — — —	無文。外面は、縦方向のナデによって調整されたのち、口縁部に限って横方向のナデによってさらに調整される。内面は、口縁部では横方向、胴部では縦方向のナデによる調整。	— — — — —	出土層 中・下・外 残 存 口縁部・胴部 焼 成 普通 胎 土 密、多量の粗砂を含む 色 調 赤褐～明赤褐 赤褐～明赤褐・黒褐	
211	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	— — — — —	深鉢形土器。底部から口縁部に向って直線的に開き、口縁部が軽く外反する小型深鉢と考えられる。口縁は平縁で、口縁部は薄く作られる。	— — — — —	無文。外面調整は、口縁部が横方向、胴部が縦方向のミガキ。内面は、口縁部が横方向のミガキ、胴部では縦方向のナデによる調整。	— — — — —	出土層 中・下・外 残 存 口縁部・胴部 焼 成 良 胎 土 密、少量の細砂を含む 色 調 暗褐～赤褐 明赤褐～暗赤褐	



209



210

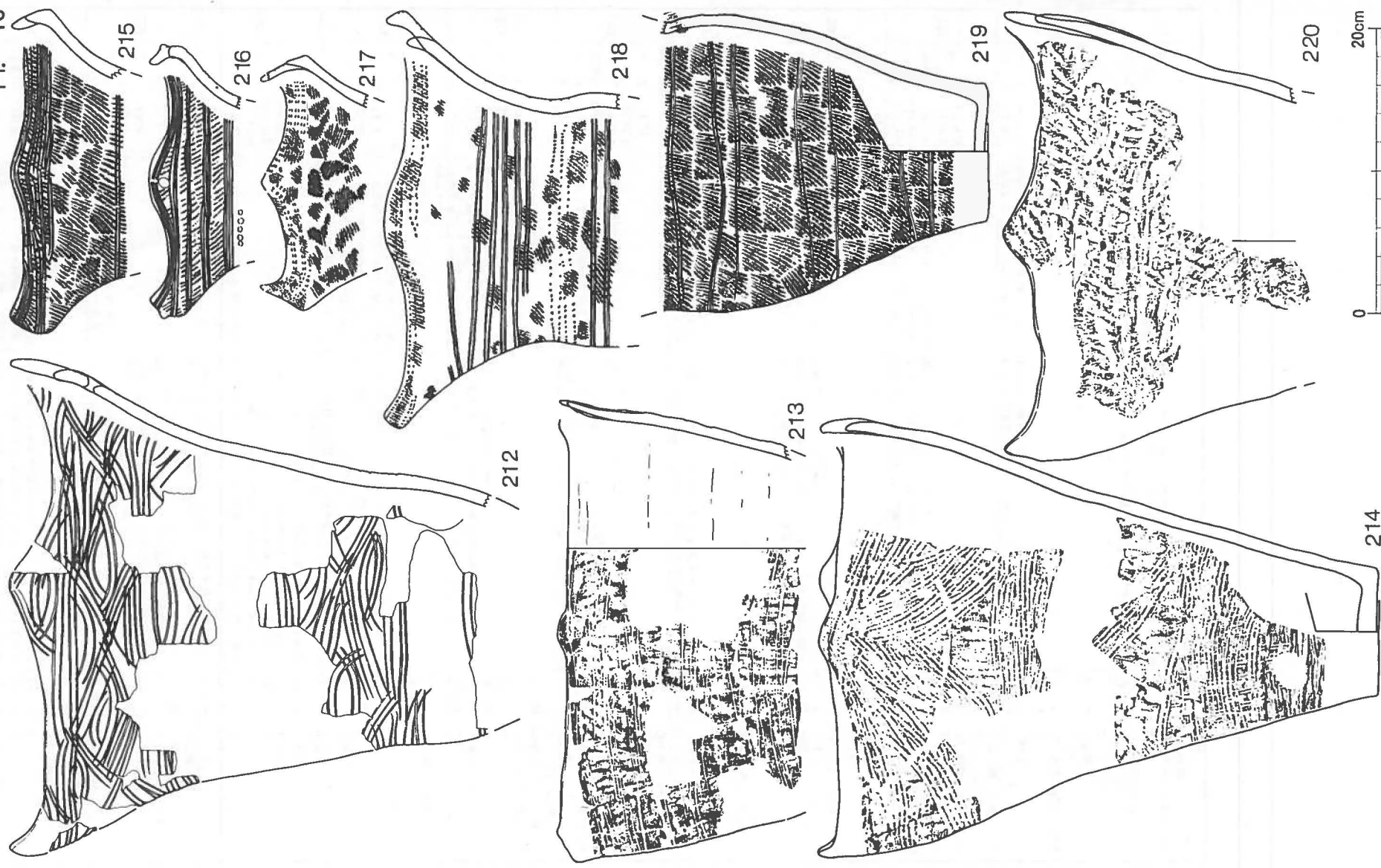


211



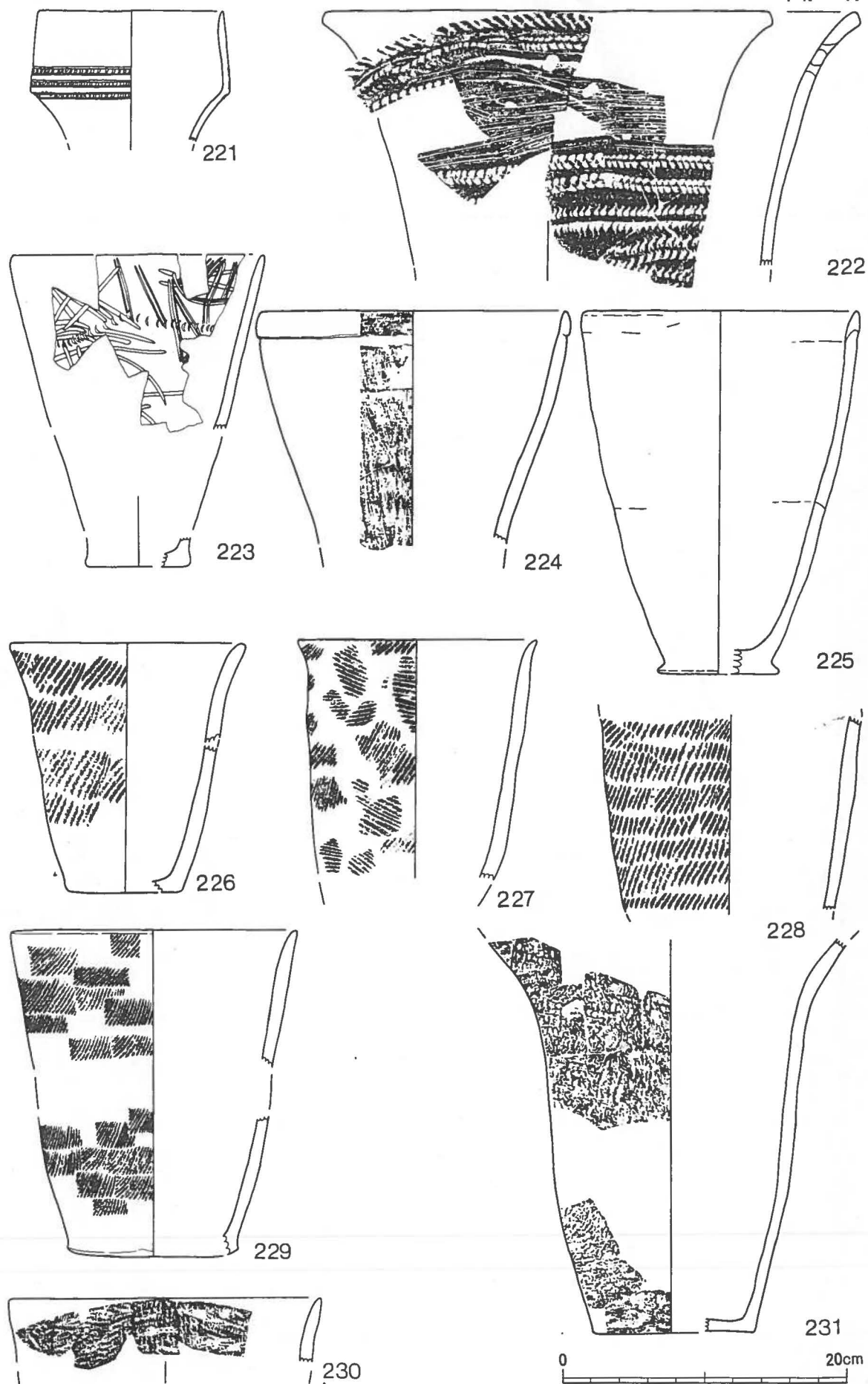
番号	法 量	器 形	文 様	状 態
212	口 径 (32.4) 底 径 — 最大径 (34.4) 器 高 [12.8] 容 量 —	深鉢形土器。胴部から口縁部に向って軽く外反し、口縁部でやや内弯気味に立上る。大型。口縁は4単位の山形波状線を呈す。	7mm幅の半截竹管による平行沈線を用いて器面全体に施文される。沈線は横走ないしは斜行して菱形あるいは三角形の区画を形づくり、区画内には木葉状文が充填される。外面は、口縁部下では縦方向、それより下の部位は横方向のナデによる調整がなされる。内面調整は、口縁部付近では横方向のミガキ、胴部は横方向のナデである。	出土層 上・中・下・外 残 存 口縁部・胴部 焼 成 良 胎 土 密 色 調 多量の粗砂を含む にぶい褐～黒褐 明褐～にぶい橙・黒
213	口 径 (32.4) 底 径 — 最大径 口径に同じ 器 高 [16.0] 容 量 —	深鉢形土器。胴部から口縁部に向って直線的にやや外傾し、口縁部は極めて、緩かなカーブを描く。口縁には小さな山形突起が4単位作り出される。口縁部は薄く作られる。	5～6mm幅の半截竹管による粗雑な横走平行沈線が施文される。沈線は浅く、不明瞭な部分がある。器面は凹凸が著しく、縦方向のナデによる調整痕が明瞭に認められる。口縁部には指頭整形痕がみられる。内面は横方向のナデによって丁寧な調整されるが、輪積み痕が見られる部分がある。	出土層 上・中・下・外 残 存 口縁部～胴部 焼 成 良 胎 土 密 色 調 多量の細砂を含む にぶい黄褐～灰黄褐 明褐
214	口 径 (29.0) 底 径 8.9 最大径 (31.0) 器 高 39.3 容 量 (10.2)	深鉢形土器。底部からほぼ直線的に開きつつ胴最上部に至り、口縁部は直立気味に立上る。口縁には4単位の山形小突起が作り出される。	6～7mm幅の半截竹管による集合沈線が器面全体に施文される。一見、貝殻条痕文を思わせる。胴上半部の沈線は、突起部下では三角形、平縁部分では逆三角形の区画帯を形成し、区画内は無文である。胴下半部にも同様な区画帯が作られる。外面は、口縁部から胴部にかけては縦方向のナデ、底面は粗いミガキによる調整。口縁部には指頭整形痕がみられる。内面は、口縁部付近は横方向、胴部では縦方向のナデによる調整。	出土層 上・中・下・外 残 存 口縁部～胴上半部 焼 成 良 胎 土 密 色 調 粗砂を含む 明褐
215	口 径 (22.0) 底 径 — 最大径 (23.0) 器 高 [8.2] 容 量 —	深鉢形土器。胴上半部は外反しつつ最大径部分に至り、さらに「く」字状に内屈し口縁部へ続くキャリバー形を呈す。口縁は4単位(推定)の波状線。	無節しげ縄文を全面に横位回転施文し、その上に3mm幅の鋭利な半截竹管による平行沈線が横走する。沈線は、屈曲部から上方の口縁部文様帯では集合沈線状に施文されるが、胴部ではやや間隔をおいて施される。内面の調整は、口縁部では横方向のミガキ、胴部では縦方向のナデ。	出土層 中・下・外 残 存 口縁部～胴上半部 焼 成 普通 胎 土 密 色 調 多量の細砂を含む 灰褐 にぶい褐
216	口 径 (17.6) 底 径 — 最大径 (19.0) 器 高 [6.5] 容 量 —	深鉢形土器。胴上半部は外反しつつ最大径部分に至り、さらに「く」字状に内屈し口縁部へ続くキャリバー形を呈す。口縁は4単位(推定)の波状線。	細緻な無節しげ縄文が横位回転施文され、その上に3mm幅の半截竹管による平行沈線が2条を一組として横走する。各々の波頂部下には瘤状貼付文が施される。胴部のくびれ部には円形刺突文が横走すると考えられるが、残存状態から全周するか否かは不明である。内面は横方向のナデによる調整。	出土層 中・下 残 存 口縁部～胴上半部 焼 成 良 胎 土 やや粗 色 調 多量の小礫を含む 明赤褐～灰褐 褐～暗褐
217	口 径 (17.0) 底 径 — 最大径 (18.0) 器 高 [7.1] 容 量 —	深鉢形土器。胴上半部は外反しつつ最大径部分に至り、さらに「く」字状に内屈し口縁部へ続くキャリバー形を呈す。口縁は4単位(推定)の波状線。	細緻な無節しげ縄文が器面全体に施される。施文の方向は一定しない。屈曲部から上方の口縁部文様帯には、半截竹管状工具による2個一組の刺突が2～3条めぐり、刺突は右方向から加えられている。内面は、口縁部では横方向のミガキ、胴部では縦方向のナデによって調整される。	出土層 下 残 存 口縁部～胴上半部 焼 成 良 胎 土 密 色 調 粗砂・中礫を含む 明褐～灰褐 にぶい褐～灰褐
218	口 径 (24.6) 底 径 — 最大径 (28.6) 器 高 [15.4] 容 量 —	深鉢形土器。胴部がやや膨らみ、胴上半部でくびれ、口縁部下最大径部分に向って外反する。ここで、さらに「く」字状に内屈し口縁部に至るキャリバー形を呈す。口縁は4単位の波状線。	無節しげ縄文を全面に横位回転施文し、その上に3mm幅の半截竹管による平行沈線が2条を一組として横走する。各々の波頂部下には瘤状貼付文が施される。胴部のくびれ部には円形刺突文が横走すると考えられるが、残存状態から全周するか否かは不明である。内面は横方向のナデによる調整。	出土層 上・中・下・外 残 存 口縁部～胴中央部 焼 成 良 胎 土 密 色 調 多量の粗砂を含む 褐～灰褐 灰褐～暗褐
219	口 径 — 底 径 9.8 最大径 (22.0) 器 高 [22.7] 容 量 —	深鉢形土器。胴部は、上半部でやや膨らみ、最上部でくびれて口縁部に至ると考えられる。キャリバー形を呈するであろう。	無節しげ縄文を全面に横位回転施文し、その上に3mm幅の半截竹管による平行沈線がやや間隔をおいて横走する。内面は横方向のミガキによる調整。輪積み痕のみられる部分がある。	出土層 上・中・下・外 残 存 胴上半部～底部 焼 成 普通 胎 土 密 色 調 粗砂・少礫を含む にぶい赤褐～明赤褐 暗赤褐
220	口 径 (30.4) 底 径 — 最大径 (31.4) 器 高 [20.2] 容 量 —	深鉢形土器。胴部から口縁部に向ってほぼ直線的に開き、口縁部で内弯気味に立上る。口縁は4単位(推定)の波状線。	無節しげ縄文が、器面全面に横位回転施文される。縄文の条は非常に太く、幅7mm～1cmにわたるところもある。内面は、口縁部が横方向のミガキ、胴部では横方向のナデによる調整。	出土層 中・下 残 存 口縁部～胴上半部 焼 成 良 胎 土 密 色 調 細砂・小礫を含む 灰褐～黒褐 灰褐

Pl. 16



縄文時代前期の土器(15)

番号	法 量	器 形	文 様	備 考
221	口 径 (13.0) 底 径 — 最大径 (14.2) 器 高 [9.1] 容 量 —	鉢形土器。底部から外反しつつ胴部に至り、胴中央部で屈曲する。さらに、やや内傾しつつ直線的に口縁部に至る。口縁は平縁。	屈曲部付近に、5mm幅の半截竹管による平行沈線が3条横走し、その上に同一の施文具によって爪形文が施される。刺突は右方向から加えられる。器面は内外とも横方向に丁寧に研磨される。	出土層 下 残 存 口縁部～胴部 焼 成 良 胎 土 密 色 調 少量の細砂を含む 黒褐～赤褐 黒褐～灰黄褐
222	口 径 (30.2) 底 径 — 最大径 (32.0) 器 高 [17.8] 容 量 —	深鉢形土器。胴部から口縁部に向って外反する朝顔形を呈す。口縁は平縁。	口縁部に斜方向の刻みが施される。口縁部直下・胴中央部に2列ずつの変形爪形文が引きずり気味に施される。さらにその下に、S字状を呈する変形爪形文状の文様が数段施文される。この施文具は不明である。口縁部下と胴部にみられる爪形文の間には、半截竹管による平行沈線文が施される。内面は横方向のミガキによる調整。一対の補修孔をもつ。	出土層 中・下・外 残 存 口縁部～胴上半部 焼 成 良 胎 土 密 色 調 多量の粗砂を含む 灰黄～黒褐 明黄褐～灰黄褐
223	口 径 (17.5) 底 径 (7.5) 最大径 (18.0) 器 高 [12.0] 容 量 (2.3)	深鉢形土器。やや突出した底部をもち、そこから直線的に開きつつ口縁部に至る。口縁は平縁。	6mm幅の半截竹管を用いた平行沈線および同一施文具の背面による沈線が、器面全面に不規則に施文される。胴上半部に、さらに同一施文具による爪形文が、緩かな波状を描きながら一条施文される。刺突は右方向から加えられる。外面は、口縁部がヨコナデ、それより下の部位はタテナデによる調整がなされる。底面はミガキ。内面はナデ調整による擦痕が見られる。補修孔をもつ口縁部破片がある。	出土層 中・下・外 残 存 口縁部～胴上半部・底部 焼 成 良 胎 土 密 色 調 粗砂を含む 時赤褐 赤褐
224	口 径 (20.8) 底 径 — 最大径 (21.4) 器 高 [16.4] 容 量 —	深鉢形土器。胴中央部は極めて緩かに外反し、胴上半部に至ってやや内側に彎曲し、そののちほぼ直線的に口縁部に向って開く。口縁は平縁。口縁部は、輪積みをそのまま利用し、段状に作り出す。これによって複合口縁状を呈する。	無文。段状の口縁部では横方向のナデによる調整がなされる。胴部は縦方向のケスリによって整形したのち、ナデ調整される。なお、胴下部に整形痕がみられる。内面は横方向ないしは左上→右下方向に研磨される。	出土層 中・下・外 残 存 口縁部～胴上半部 焼 成 良 胎 土 密 色 調 多量の粗砂を含む 灰黄～黒褐 明黄褐～灰黄褐
225	口 径 (18.8) 底 径 (9.2) 最大径 (19.6) 器 高 [25.4] 容 量 (4.0)	深鉢形土器。突出した底部から、極めて緩かに彎曲しつつ口縁部に向って開く。	無文。外面は縦方向のケスリののち、粗いミガキによって調整される。内面は、横方向の粗いナデ調整。内外面とも輪積み痕がみられる。	出土層 中・下・外 残 存 口縁部～底部 焼 成 良 胎 土 密 色 調 多量の細砂を含む 明赤褐～にぶい褐 にぶい褐・黒褐
226	口 径 (15.5) 底 径 (8.4) 最大径 (16.7) 器 高 [6.4] 容 量 (10.6) (1.5)	深鉢形土器。底部から胴上半部に向ってほぼ直線的に開き、そこからやや外反しつつ口縁部に至る。口縁は平縁。	器面全体に無節しげ縄文が横位回転施文される。口縁部は横方向のナデ、底部は竹管状工具による粗いミガキによる調整。内面は、口縁部付近では丁寧なミガキ、胴部以下は横方向のナデ。	出土層 中・下 残 存 口縁部～胴上半部・胴下半部～底部 焼 成 普通 胎 土 密、多量の粗砂を含む 色 調 時赤褐～赤褐 時赤褐～赤褐
227	口 径 (16.4) 底 径 — 最大径 (17.0) 器 高 [16.9] 容 量 —	深鉢形土器。胴下半部から口縁部に向ってほぼ緩かに直線的に開き、口縁部がわずかに外反する。不整形。口縁は平縁で、口縁部は薄く作られている。	器面全体に無節しげ縄文が、概ね横位回転施文される。内面はナデ調整。部分的に輪積み痕がみられる。	出土層 中・下・外 残 存 口縁部～胴部 焼 成 良 胎 土 密 色 調 多量の細砂を含む 明褐 明赤褐
228	口 径 — 底 径 — 最大径 — 器 高 — 容 量 —	深鉢形土器。やや外傾気味の胴部。底部からほぼ直線的に開きつつ口縁部に至る器形であろう。	器面全体に無節しげ縄文が、横位回転施文される。外面は、部分的に器面剥離がみられる。内面は横方向の粗雑なナデによる調整。	出土層 中・下 残 存 胴部 焼 成 不良 胎 土 密、多量の粗砂・中礫を含む 色 調 時赤褐 赤褐
229	口 径 (19.8) 底 径 (12.0) 最大径 口径に同じ 器 高 [9.8] 容 量 —	深鉢形土器。底部から口縁部に向ってほぼ直線的に開く器形を呈す。底部がわずかに突出する。口縁は平縁。	器面全体に細微な無節しげ縄文が横位回転施文される。内面は、口縁部付近で横方向、胴部では左上→右下方向の粗いミガキによる調整。	出土層 上・中・下・外 残 存 口縁部～胴上半部・胴下半部～底部 焼 成 普通 胎 土 密、細砂・中礫を含む 色 調 粒～にぶい褐 にぶい褐・黒褐
230	口 径 (21.6) 底 径 — 最大径 — 器 高 [4.5] 容 量 —	深鉢形土器。口縁部はわずかに外傾する。口縁は平縁。	単節Rしげ縄文を不規則に施文。内面は、部分的に縦方向のナデ調整が行われる。	出土層 上・中・下・外 残 存 口縁部 焼 成 良 胎 土 密、多量の粗砂・中礫を含む 色 調 灰黄褐 にぶい黄褐
231	口 径 — 底 径 (11.3) 最大径 — 器 高 [27.0] 容 量 —	深鉢形土器。底部から極めて緩かに外傾しつつ胴上半部に至り、そこから大きく外反し口縁部につながる朝顔形を呈する。	器面全体に、撚りの粗い複節しげ縄文を、概ね縦位回転施文させる。糸間がかなり広い。内面は、口縁部は横方向のミガキ、胴部～底部は横方向のナデによる調整。	出土層 中・下・外 残 存 胴上半部～底部 焼 成 普通 胎 土 密、多量の細砂を含む 色 調 褐～明褐 明褐



縄文時代前期の土器(16)

